

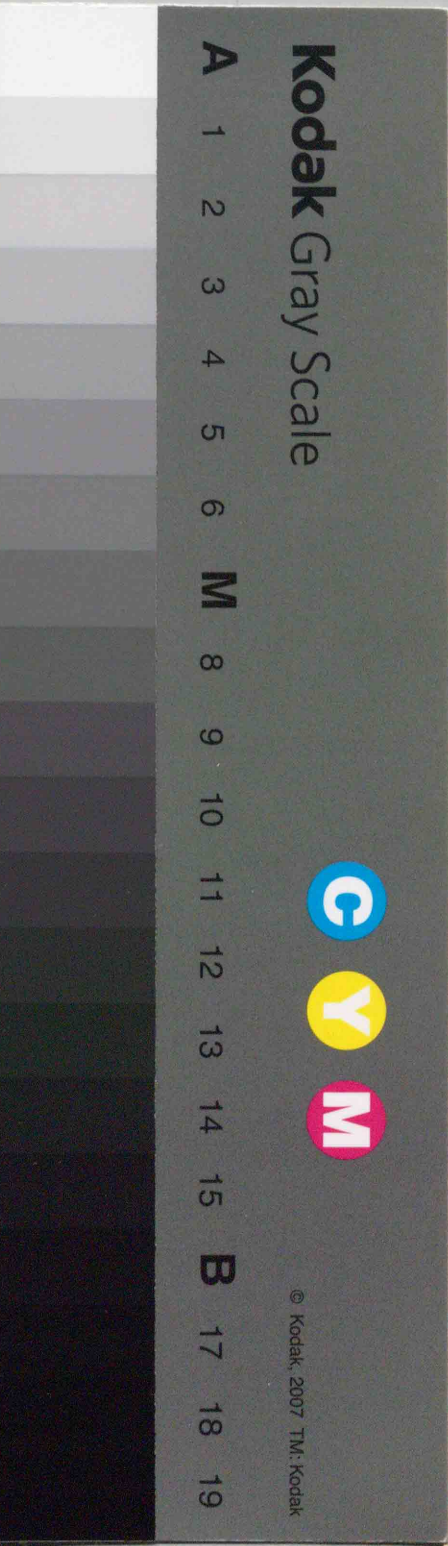
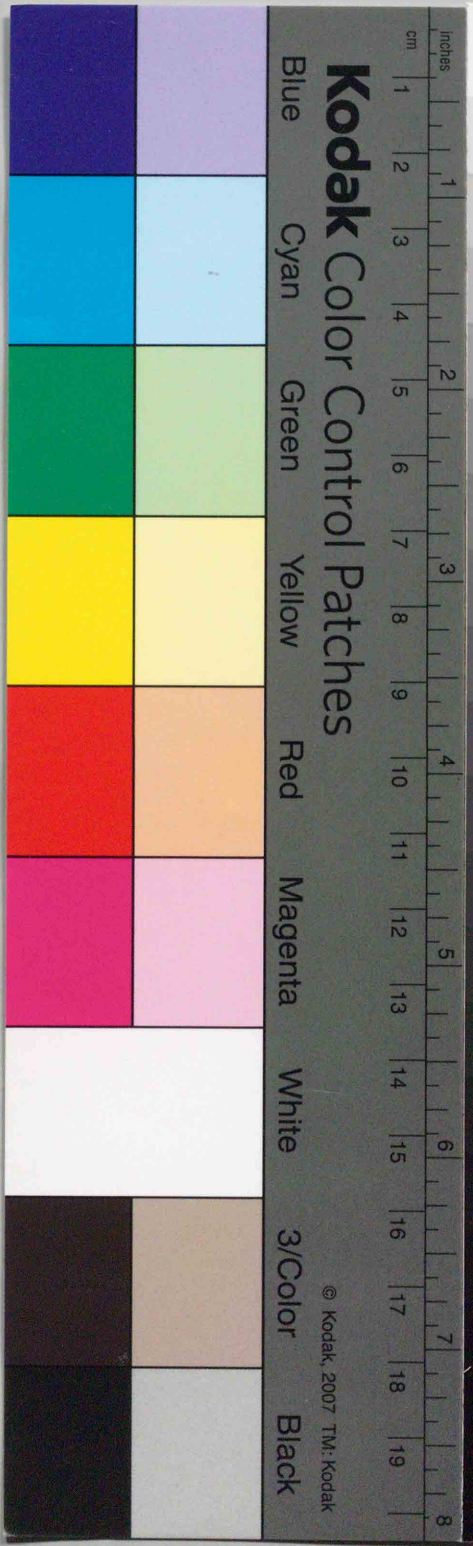
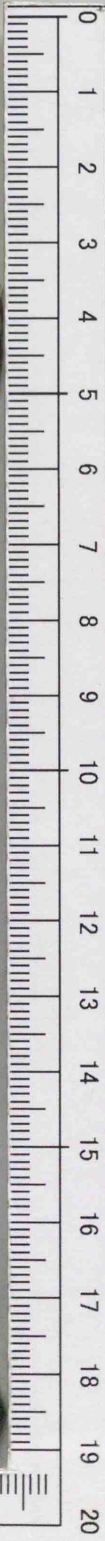
3759
Y019
資料室

學中
書科教文國

四卷



教
4
20



41809

教科書文庫

4
810
41-1930
20000
54739



© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

教科書文庫
4
810
41-1930
2000054739

375.9
Y019

文部省檢定
昭和五年一月廿一日
中學國語教科用

中國文教科書

吉田彌平編

東京 光風館藏版

卷四

広島大学図書

2000054739



文部省檢定
昭和五年一月廿一日
中學國語教科用

中國文教科書

吉田彌平編

東京 光風館藏版

卷四



(筆濤松尾松) 原松の保三

吉田五郎
中國文藝叢書

中國文教科書卷四

目次

一	明治神宮	清口白年	一頁
二	水戸のみゆき(昭憲皇太后御作)	二七
三	事しあらば	二七
四	故郷	正岡子規	三三
五	村の思出	加藤武雄	三三
六	石榴	薄田泣菫	三三
七	髻	夏目漱石	三三

目次

一

●八	貢進生……………	穂積陳重	五
✓九	杉浦重剛君を弔す……………	穂積陳重	五
○一〇	相模灘の落日……………	徳富健次郎	七
○一一	月の洞庭湖……………	佐々木信綱	七
✓一二	灯を消して……………	櫻井忠温	七
一三	東國武士……………	萩野由之	八
✓一四	豆柿と小禽……………	北原白秋	九
✓一五	有情十首……………	九	九
○一六	伊吹山……………	近松秋江	一〇
○一七	甲賀孫兵衛……………	大町桂月	一〇
○一八	武藏野……………	國木田獨歩	一六

○一九	淺草紙……………	吉村冬彦	一〇
✓二〇	讀書……………	坪内逍遙	一〇
✓二一	伊達政宗……………	湯淺常山	一〇
✓二二	柳生宗矩……………	新井白石	一〇
○二三	わが袖の記……………	高山樗牛	一〇
✓二四	棕櫚と躑躅……………	島崎藤村	一五
二五	樹の根……………	和辻哲郎	一五
✓二六	グラッドストーン……………	水野鍊太郎	一六
○二七	岩倉右府……………	井上毅	一七
二八	膽力……………	嘉納治五郎	一八

目次終

中國文教科書卷四

溝口白羊
名は駒造
文學者

代々木の森
東京市の西郊代
代幡町大字代々
木にある森林
私
本文の作者溝口
白羊
名は駒造
文學者
明治十四年大阪
市生

一 明治神宮

溝口白羊

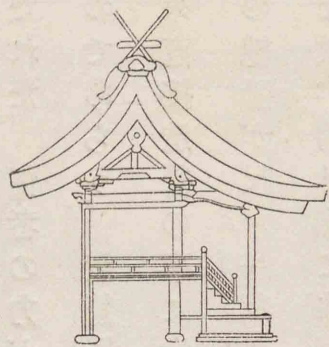
快美なる色彩の反射と和かい感觸とをもつた秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら、幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

或時は、無数の麩の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、曳々聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだと、さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、生みの親の墓に對する様な強い懐かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出来て、殿舎の形の次第に整つて行くのが、たまらない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮がたうとう竣工を告げた。

流造
ながれはぶづりともいふ
側面は破風造で棟から前の軒先までを棟から後の軒先までより長くしてそりをもたせた造りかた

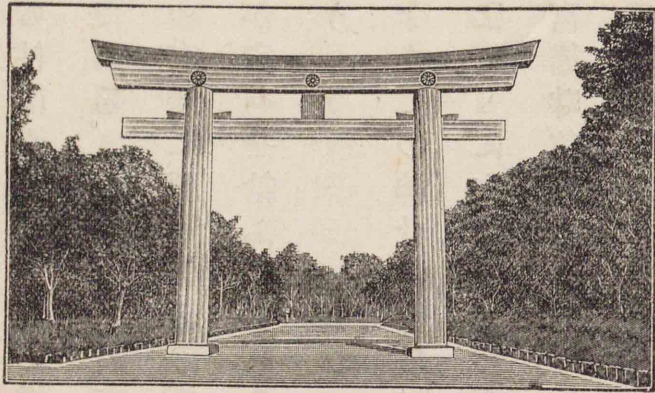


流造

かつて赤土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つものならんで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間にもやらすつかり見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域 眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と優雅との領土。私ははじめて完成した明治神宮の神苑に立つたとき、其の改つた光景を見て、今更のやうに強烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺、一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して隠れた部面に働いた強い力こそ、實に此の明治神宮の基礎を千載不動の固さに築きあげたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖徳と、海よりも深い昭憲皇太

尺、
切口一尺四方長
さ二間の材木を
尺一本といふ



明治神宮大鳥居

後の御仁慈と、此の二柱の大神の御恵みに對へ奉る國民の至純なる感謝の心情と、此の三つのものが陰に陽に工程を拂らせ、遂に此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力であることは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實である。嗚呼、純粹な至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、百里、二百里の遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか。實に此

の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇、昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

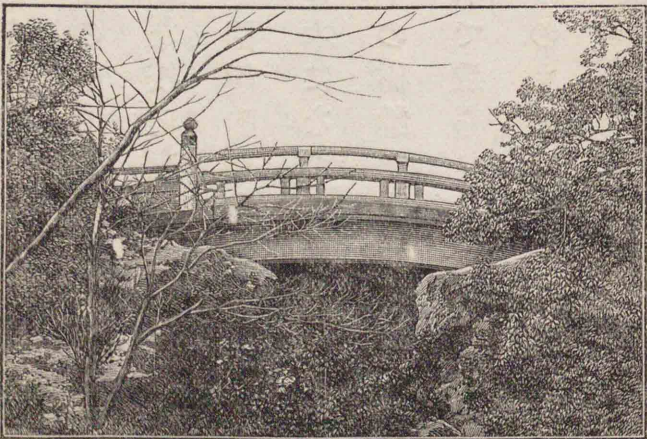
今までの神社に會て見たことの無い明治神宮の特色は實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那、第一に此の事を直感した。そして一步々々、美しい小砂利の上を、神殿に近く踏入るに隨つて、愈、肅然たる心持になつ

て、深く襟を搔合せた。

參道の兩側には盡きることを知らない密林がどこまでも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。

鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山市萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した風致の好い細流

萬成
花崗石の名産地



橋 神

紅於ハナリ
霜葉紅ニ於二月
花ヨリ唐の杜牧

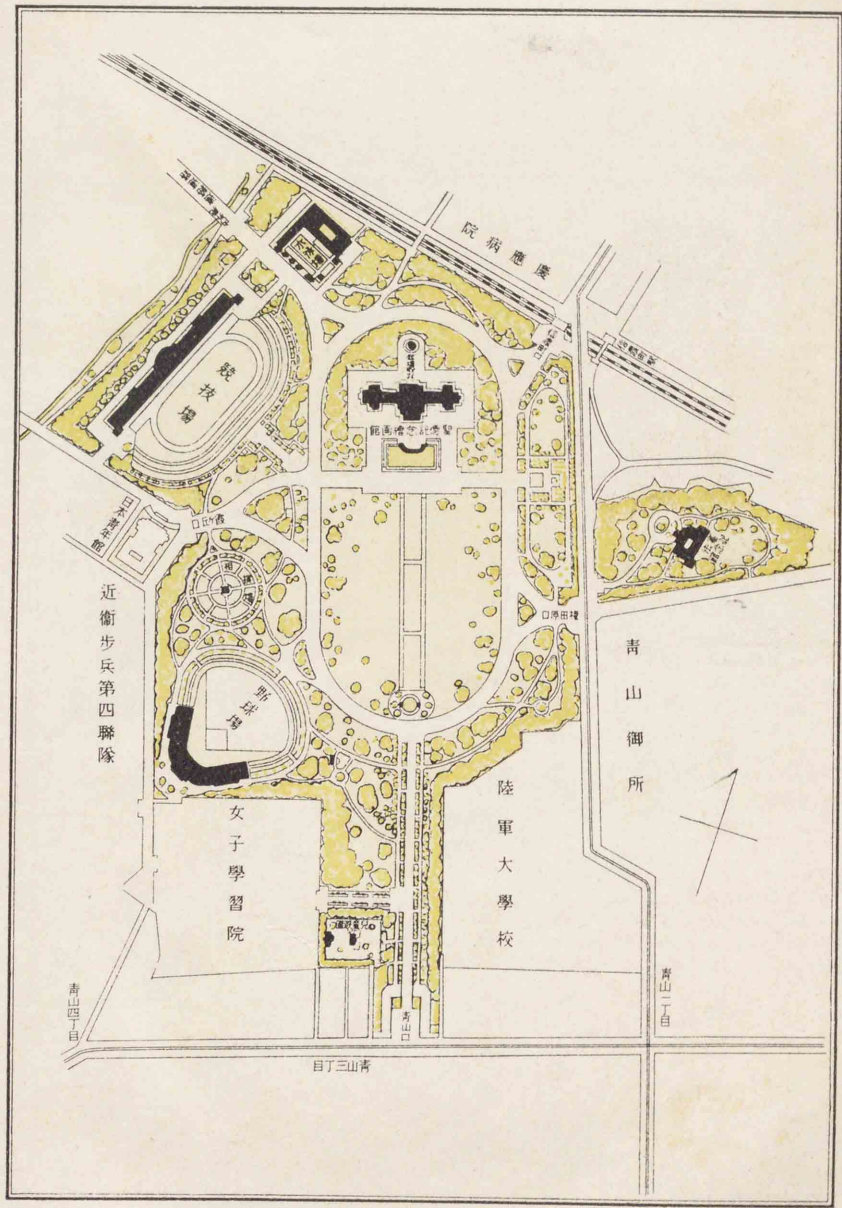
明神鳥居
柱は圓く笠木。
鳥木はそりを持
ち、額東・くさ
びがある。
原宿
東京府豊多摩郡
千駄ヶ谷町大字
原宿

の兩岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が、今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總べてが繊細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。神橋を渡ると、兩側は一帯の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に、千七百四十の樹齡を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事だ。此の鳥居の在る處は南方原宿ハロジ方面からする幅員八間の南



明治神宮
神門
第一鳥居
第二鳥居
第三鳥居
第四鳥居
第五鳥居
第六鳥居
第七鳥居
第八鳥居
第九鳥居
第十鳥居
第十一鳥居
第十二鳥居
第十三鳥居
第十四鳥居
第十五鳥居
第十六鳥居
第十七鳥居
第十八鳥居
第十九鳥居
第二十鳥居
第二十一鳥居
第二十二鳥居
第二十三鳥居
第二十四鳥居
第二十五鳥居
第二十六鳥居
第二十七鳥居
第二十八鳥居
第二十九鳥居
第三十鳥居
第三十一鳥居
第三十二鳥居
第三十三鳥居
第三十四鳥居
第三十五鳥居
第三十六鳥居
第三十七鳥居
第三十八鳥居
第三十九鳥居
第四十鳥居
第四十一鳥居
第四十二鳥居
第四十三鳥居
第四十四鳥居
第四十五鳥居
第四十六鳥居
第四十七鳥居
第四十八鳥居
第四十九鳥居
第五十鳥居
第五十一鳥居
第五十二鳥居
第五十三鳥居
第五十四鳥居
第五十五鳥居
第五十六鳥居
第五十七鳥居
第五十八鳥居
第五十九鳥居
第六十鳥居
第六十一鳥居
第六十二鳥居
第六十三鳥居
第六十四鳥居
第六十五鳥居
第六十六鳥居
第六十七鳥居
第六十八鳥居
第六十九鳥居
第七十鳥居
第七十一鳥居
第七十二鳥居
第七十三鳥居
第七十四鳥居
第七十五鳥居
第七十六鳥居
第七十七鳥居
第七十八鳥居
第七十九鳥居
第八十鳥居
第八十一鳥居
第八十二鳥居
第八十三鳥居
第八十四鳥居
第八十五鳥居
第八十六鳥居
第八十七鳥居
第八十八鳥居
第八十九鳥居
第九十鳥居
第九十一鳥居
第九十二鳥居
第九十三鳥居
第九十四鳥居
第九十五鳥居
第九十六鳥居
第九十七鳥居
第九十八鳥居
第九十九鳥居
第一百鳥居

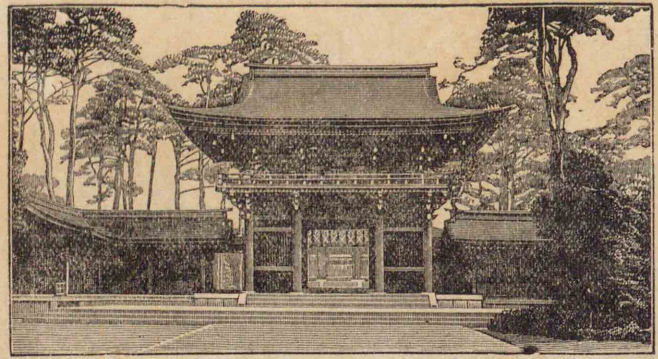
宮 神 治 明



明治神宮外苑

千駄ヶ谷
 東京府豊多摩郡
 千駄ヶ谷町大字
 千駄ヶ谷

土佐繪
 平安朝の末に起
 つた風俗畫
 藤原基光・隆能
 などを祖とする



參道と、北方千駄ヶ谷から來てゐる幅員六間の北參道との

を合せて、其の總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林

南 神 門 (樓 門)

接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭亭として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出来る。御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物

産の檜材を以て造られてある。近く拜殿にのぼつて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、即ち神靈のおはします内々院で、衆庶の漫に窺ふことを許されない神聖の場所である。

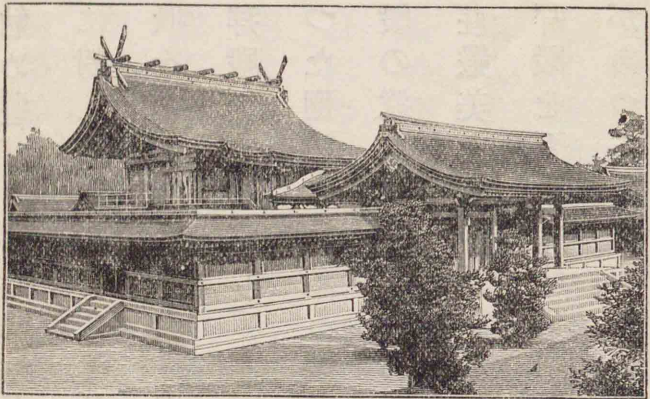
何事の
西行法師の歌

何事のおはしますかは知らねども、

かたじけなさに涙こぼるゝ。

私は黙禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が皆暗い周囲から来る鈍い光波の中に、静寂な、併し陰鬱な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隠す所の無い心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを露出して見せてゐる。而



本殿

も、それでゐて決して淺膚な心持はせずに、却て一層深く大きくされた静寂の中から、譬へやうのない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭のさがるやうな強い威力が迫り來るのを覺えるのだ。いかにも明治天皇の神靈を奉祀するにふさはしい神宮である。

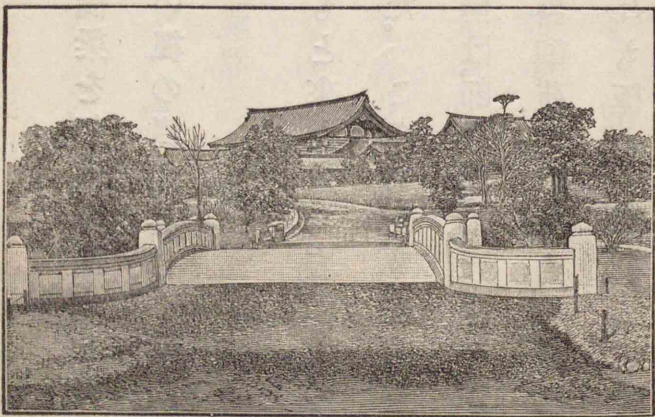
久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して國民と近

く觸接し、國民と親しく協力して新文明を吸収しようとする御
勉め遊ばされた明治天皇の活動的進取的の潤達な御氣象
に對して、如何にもその明るいお宮の感じが、びつたりと呼
吸を合せてゐるやうに思はれる。

拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張
つた廻廊に見える幾多の列柱、そして其の奥につゞいて便
殿の遠く望まれる心持、それら總べてが、又、たとしへもない
莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に互る森林帯
があつて、その向ふ、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺め
るやうな芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。

嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。
こゝらへ來ると、周圍の林苑は著
しく庭園風を帯びて來て、樹林を
組成する色々の樹種の中に落葉
樹の交つてゐるのが少なからず
目につく。寶物殿へ行くまでの
道には、ずつと長い間、さうした色
彩が續いてゐる。寶物殿は形式
を中古時代に取つて、其の材料と
建築の方法とを現代に取つた鐵
筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これ

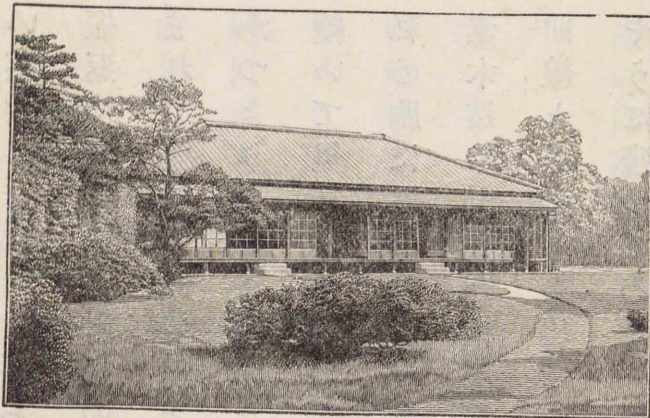


寶物殿

八幡製鐵所
福岡縣八幡市に
ある國立の製鐵
所

に使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及んだといはれてゐる。後は一帯の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘をめぐつてわか／＼しい楓の樹が美しく植ゑつらねてある。私は此の寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の枡形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり左右兩側にある古雅な木柵を廻らした一構は、即ち明治天皇昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、何れも極めて御質素のものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのままの

舊御茶屋
臨雲亭と申す



ある。

もので、殊更技巧を弄しない處に何ともいへぬ優雅な趣を帯びてゐる。此の御苑は祭神二柱の御在世中殊に御愛賞遊ばされた處で、大空高く聳えてゐる松を背景にした芝生のあちこちに、雲しをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連なり續いてゐる櫟や檜の雜木林にも、東京近郊では到底見る事の出來ない野趣がある。

私はこれらを一わたり拜見して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。振返つて見ると、神殿のあたりはすつかりもう深い靄に包まれて、晝でも暗いほど黒々と生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切り開いたやうに、路線の白い色の暮れ残つて續いて見えるのが、何となく嚴肅な氣分を起させた。私の胸には、其の神祕な境の中に、ほんのりと浮んで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄附けられたやうに残つてゐた。

一草一木の末にも祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な、

幽邃な優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果して此の深い印象を忘れる日があるだらうか。（明治神宮紀に據る）

二 水戸のみゆき（昭憲皇太后御作）

明治二十三年十月二十六日といふ日、茨城のあがたへみゆきせさせたまふ。こは近衛兵の演習を親しく御覽せさせ給はんとてなりけり。みづからも従ひ奉るべく、豫て仰言ありしかば、いと嬉しくていでたつ。この大御代ならずば、いかで女の身にてかゝることを見んと思ふに、おのづから心も勇みたちて打笑まれぬ。御車、上野の停車場に駐る。やがて樓の上にぞのぼらせ給ふ。東宮にも御送に、とくよ

東宮
大正天皇

太后宮
英照皇太后
幸子
萬里小路幸子

侍從長
徳大寺實則

り参り給へり。太后宮よりも典侍幸子御使に参りて、あつ
き仰言ども奏す。みづからも畏き御言葉承はる。かくて
おととをはじめ、送り奉る人々多かるを、もらし給はず御前
近く召してみことばあり。ほどなく侍從長参りて、何事も
整ひたりと奏す。やがて劍璽を先だて、汽車に召させ給
ふ。みづからも列なれる車に乗る。笛の音きこゆるまも
なく、烟をあとにして、御車はとく進みぬ。道のほど大かた
は田畑にて、さのみかはれることもなし。されど、いづこも
稻のみのりよきを見るは、民のため嬉しきことぞかし。埼
玉のあがたは、さいつころの洪水に利根川の水溢れきとて、
民のいたづきておほしたてし畑つものなども皆荒れはて

たり。河の如き處もありて、みゆきをろがむ人々も、あるは
水に入り、あるは舟を浮べなどす。いかにして一日々々を
送りつらんと思ふに、胸いたうなりもてゆく。そこを過ぎ
ぬれば、稻葉の浪、田のみにみちあふれたるけしきに、心もか
はりぬ。處々のさまめづらしなどいひつゞくる間に、早う
水戸に着かせたまふ。停車場より御馬車にて行在所に入
らせたまふ。こは舊城内にある師範學校をそれと定めた
まへるなりとぞ。とばかりありて、例の御對面の事あり。
果てさせたまひし後も、いさゝか疲れさせたまふみけしき
なくて、明日の演習の方略書などとうでさせて御覽ず。か
く御心に懸けさせ給ふを見奉るも畏し。この夜も常のご

六戸
 茨城縣西茨城郡
 六戸町
 水戸市の西十一
 哩に六戸驛があ
 る
 有栖川宮
 熾仁親王
 北白川宮
 能久親王
 岩間村
 同縣同郡岩間村
 六戸町の南一里
 今は常磐線(當
 時は未開通)の
 一驛

とく十一時に大殿籠りぬ。
 二十七日、けふも天氣よし。八時よりいでたゝせたまふ。
 汽車にて六戸といふ處までわたらせ給ひ、それより金華山
 と名づけたる御馬にめさせたまふ。有栖川宮、北白川宮を
 はじめ、大臣その外あまたの人々、近衛の將校なども馬にて
 従ひ奉りぬ。みづからは馬車にてゆく。岩間村に到らせ
 給ふころ、遠近に烟立ちのぼり、銃の音こゝかしこに聞えて、
 赤白の旗、風に打靡き、馬の嘶く聲もところどころに聞えたり。
 戦鬨ならんと思ふころは、銃の音も絶間なきに、御心勇ませ
 たまひて、折々はことかたに御馬を進めさせつゝ、ねもごろに
 御覽じたまふ。折しも、秋の末つ方なれど、日かげは猶暑く

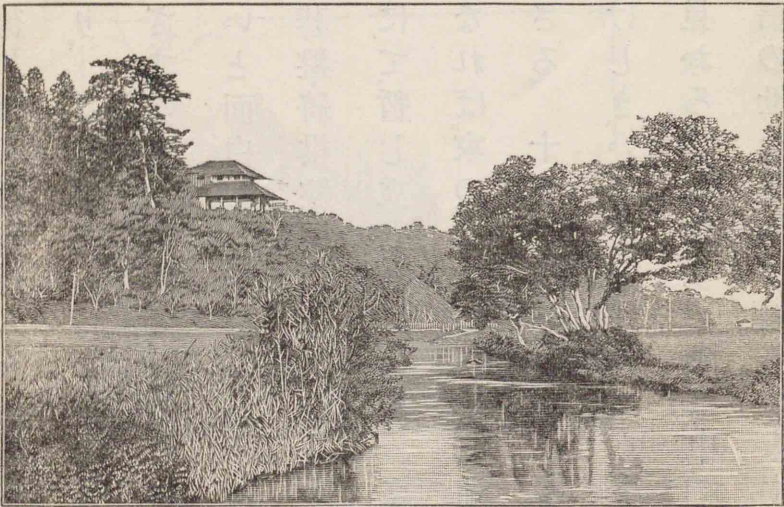
成井村
 同縣新治郡園部
 村大字成井
 岩間の南一里
 筑波山は西の方
 三里

覺ゆるに、更に厭はせ給ふみけしきもなきを、この演習に出
 でたる兵どもは更なり、文武の官人なべて畏み奉るなるべ
 し。程なく終りぬと奏するより、御野立にて、しばし憩はせ
 給ひ、さて汽車に召して行在所へ還らせたまふ。
 二十八日も昨日の時刻より出でたまひて、こたびは成井村
 にて御覽あり。筑波山近く見えて、景色いとよし。大方は
 昨日の如し。されど今日は敵の近づきたりと見えて、大砲
 小銃の音烈しく、廣き原にも響き渡りぬ。上には例の御馬
 にて、道も定めさせたまはず、森の中、松の林などに分けいり
 て見めぐらせたまふに、木の枝の御鐙にかゝるも、いと畏し
 みづからも車より出でて小銃の連發又は大砲の打方など

も見ずやと附添へる士官のいふに、さらばとて、おりたつ。黒烟立ちのぼる中に、火氣見えて烈しき音の聞えたる、いと勇まし。事あらん日は親妻子をも顧みず、君のため命を捨て、戦ひなんと思ふに、いとたのもしくはあれど、又いたはしくて、胸もふたがるこゝちぞする。今日の演習も果てぬれば、御野立にて晝のおものきこしめす。それより御馬上にて觀兵式分列式御覽ず。みづからは例の馬車にて見る。終りて審判あり。小松宮はじめ將校打集ひて御前に進む。兩日の勞を犒^{いたさ}ひ給ふみことばあり。かたじけなみ奉りて敬禮するさま、見るもめでたし。小松宮には兩日の演習のよしあしを高らかにことわりたまひぬ。しばし御休あり

小松宮
彰仁親王
ア×

常磐公園
水戸市の西郊常
磐村にある
徳川齊昭の開い
たところ
もとは借樂園と
いつた
好文亭
借樂園の西隅に
建てた亭



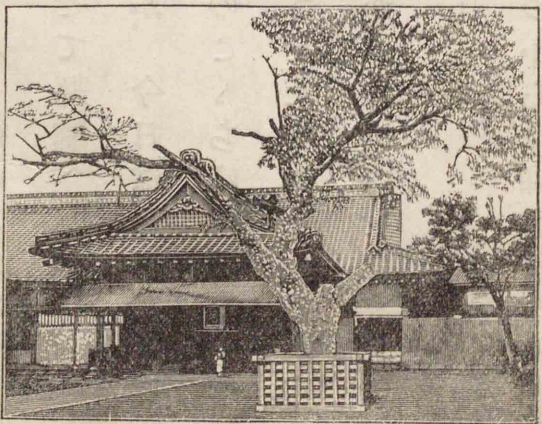
て、汽車にて行在所に歸らせ
たまふ。御道よりおぼした
たせて縣廳へ臨幸ならせた
常まふ。今日はあやにくに御
磐風のこゝちにて例ならず見
えさせたまふをもてかくし
て、かく勉めさせたまふ、いと
園畏し。
みづからは仰言によりて、常
磐公園なる好文亭といふと
ころにゆく。いたりつけば、

徳川昭武
徳川齊昭の子
後子爵を賜はつた

仙波湖
水戸市の東南にある沼

齊昭
水戸藩主
萬延元年(三〇〇)
薨
年六十一
烈公と諡した

徳川昭武その外人々出迎へたり。梅あまた植ゑたる林あり。こは事ある時の爲に實を貯へんとてなりとぞ。さまざまの木立ありて、庭の作りざまいと面白し。老松のかげに石の碁盤、將棋盤据ゑおきたる、珍らかなて、暫し立寄りて見る。高き處なれば、家のうちより仙波湖見渡さる。十五夜の月のさしのぼるけしき、いとよし。色づく小田も見おろされたり。こは中納言齊昭の世を遁れて後、心易くすまひして民のなりはひを見ん



弘道館

弘道館
天保十二年齊昭が建てた藩學記
弘道館記
徳川齊昭の撰文し且書したもの



八 卦 堂

ために造りしといふ。さもあるべくおもはる。家の内廣らかにて、杉戸には詩の韻字残らず書かせて、詩人を招く時の爲とし、又五十音にてをは書かせて、歌人のためとしたる、心しらひのあつさを思ふに、いとゆかし。また板敷あり。こゝは心ある人にをりく、酒など興へし處なりとぞ。たちかへる道のほど、弘道館の碑を見る。八角の堂のうち、に寒水石の大きやかなる、立てり。世に知られたる記を自筆のまゝほりいれたるなりけ

り。一句々々讀みもてゆくに、その人の御國を思ふ心ざし慕はれて、涙ぐまれぬ。扉にはこまやかなるほり物あり。鴨居とおぼしきところには、易の八卦を彫りつけたり。昔は此處に學舎數多ありきといふ。げに珍しき處を見しか

な。是も上の仰言なくばと。いと嬉しくて、時の過ぐるを覺えず。人々、夜更け侍りぬべし。といふに驚かされて、急ぎ還る。月夜なれど、篝火焚き、提灯などあまた照して晝の如し。御前に參る。上には六時ばかりに歸りまし。きと聞きて、後れ侍りぬ。など奏するに、打笑はせたまふ。好文亭の事などつばらかにと思へ

八卦
乾坤巽艮坎兌離



八卦
乾 ☰ 坤 ☷ 巽 ☴ 艮 ☶ 坎 ☵ 兌 ☱ 離 ☲ 震 ☳

ど、とみに言ひつくすべうもあらねば、かたはしのみ奏す。記さまほしき事ども多かれど、筆も進まず。ことに明日東京へ還りまさんとて御調度ども取納むるに物騒がしければ、書きさして止みぬ。 (昭憲皇太后御集)

三 事しあらば

佐久良東雄

事しあらばわが大君の大みため、
人もかくこそ散るべかりけれ。 (落花を見て)
おきふしも寝ても覺めても思ひなば、
たてし心のとほらざらめや。

佐久良東雄
常陸の人
勤王家
櫻田の變に坐して萬延元年(二五三)年五十年死

筆蹟

深山月
瀧川のいはにせ
かゝるおとすみ
てありあけのつ
きにましらなく
なり

東雄

蹟筆雄東良久佐

伴林光平

河内の人
勤王家
五條の天誅組に
加り元治元年(三
五)刑死
年五十二

伴林光平

ますらをの屍くさむす荒野らに

咲きこそ匂へ大和なでしこ。

度會の宮路に立てる五百枝杉

かげ踏む程は神代なりけり。

佐久間象山

佐久間象山

信濃松代藩士
幕末の先覺
元治元年(三五)
横死
年五十四

久坂義助

長州藩士
勤王家
元治元年(三五)
戦死
年二十六

久坂義助

梓弓眞弓槻弓さはにあれど、

この筒弓にしくものあらめや。(詠銃砲)

みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ

舟より遠くものをこそおもへ。

いくたびもくりかへしつゝわが君の

みことしよめば涙こぼるも。

ものゝふの臣の男の子はかゝる世に

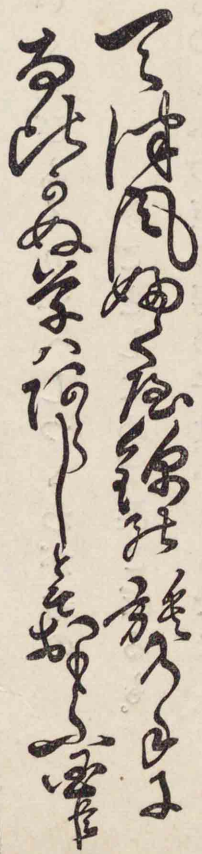
なに床の上に老いはてぬべき。

平野國臣

わが心岩木と人やおもふらん、

平野國臣
福岡藩士
勤王家
元治元年(三五)
刑死
年三十七

世のためすてし あたら 妻子を。
數ならぬ草の下葉の露の身も
死なばや死なん、大君の邊に。



平野國臣筆蹟

野村望東尼

ものゝふの大和心をより合せ、
末ひとすぢの大繩にせよ。
平らけき道失へる世の中を

野村望東尼
福岡藩士野村貞
貫の妻もと
勤王家
慶應三年(三五七)
歿
年六十二

天津風ふくや錦
の旗の手になひ
かぬ草はあらし
とそおもふ
國臣

望東筆蹟
ゆりあらためん天地のわざ。(安政大地震の折)



三條實美

大君はいかにいますと仰ぎ見れば、
高天の原ぞ霞みこめたる。

(筑紫にさすらへし程の歌の中に)

萬世の名こそ惜しけれ、うつせみの
世の人はさもあらばあれ。(同)

岩倉具視

こと國の文のは
やしにましりて
もさくいるかへ
ぬ山さくらかな
望東

三條實美
舊公卿
太政大臣
公爵
明治二十四年薨
年五十五

岩倉具視
舊公卿
右大臣
公爵
明治十六年薨
年五十九

勅なれば髪はきりもし剃りもせん、

清きころは神ぞしるらん。

（籠居中の作）

賤が屋に身は垢つきて住めれども、

なほすゝけぬは心なりけり。 （同）

四 故郷

正岡子規

世に故郷ほどこひしきものはあらじ。花にも月にも喜にも悲にも、まづ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學問を究め、見聞を廣くする地にはあらず。されど故郷には歸りたし。故郷は事業を起し、富貴を得る地にはあらず。されど故郷には住みたし。兩親姉妹あるが爲に故郷に歸りた

正岡子規
名は常規
俳人
歌人
愛媛縣松山市生
明治三十五年歿
年三十六

しと思ふもあらん。 （思ふ者あらん） 我は親同胞ともに故郷にあらねど、なほ故郷こそこひしけれ。都にありて世を厭ふが爲に故郷に住みたしと思ふもあらん。 （さうまでに） 我はさまでに世を厭ふふし



學生時代の正岡子規

もなく、猶故郷こそこひしけれ。 （せきまうん） 想へば十餘年の昔は、やり氣の抑へ難くて、單身故郷を出でゆかんとこそは勇みしか。いざ首途といふ際に、一點の熱涙は覺えず頬のあたりを流れ来るを見送の人に見せじと顔背けたる時の苦しさ、 （かしら） 何やら胸につかへた

る心地なりき。母親の乳房と故郷の土とは離れうきものなり。

故郷近くなれば、城の天守閣こそ先づわが目をよろこばす種なれ。低き家、狭き町、寂しき繩手、丈高き稻の穂、鼻のさきに並びたる連山、をさなきころより見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるがごとく、一としてなつかしからぬはなし。まづ身よりの家を此處彼處と音づれて久潤の情を敍ぶれば、年老いたる婆々様、瘦せたる叔父御、肥えたる叔母御、よく居眠する下女の顔さへ見覺えたるまゝに少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも、歸り着きし瞬間なり。

變らぬはめでたけれど、全く變らでは何の面白き事かあらん。變らずと見るうちに、いさゝかながら、かれもこれも變り行きたるこそ、なかく却見に聞きて、見て、ゆかしけれ。人の上につきて第一に變りたるは、わが従弟妹のいたくも成長したることなり。「都の人こそ來たまへれ。われも其の顔見ん」などひしめきあひ、わが前に跪きて禮を述ぶるもあれば、襖の隙よりはづかしげに窺ふもあり。をさなきは、はじめて見たる顔もあり。さらぬも、おもかげばかりはもとのまゝにて、振分髪、の、兒鬢に變りたるも少なからず。曾て見し時には、小學讀本を高らかに讀上げて誇らしげに人に聞かせたる男の子の、今はもはや海陸軍を談じ、外國の形勢を

説く程になりたるもあり。唐黍の殻なども拵へたる籩を箱の上に並べて、まゝ事に餘念なかりし女の子の嫁入すべきほどになりて、わが膝もとに茶を汲みて置きながら顔もえあげて退きたるなど思へば、彼方よりは我をもしか年とりたりと見るらんと、獨り心に恥づること多かり。戸の外に出づれば、何縣士族寄留といかめしく標札せる家どもの、大方は聞知らぬ人の名を示して、中にも陸軍出仕の人々多く見受けらる。幼き時より馴染になりし本屋は昔のさまながら、見なれぬ丁稚は我を十年前の華客とも知らず、よそくしくもてなしたるも本意なく覺ゆ。豫て知りたる道具屋は引越し、か潰れしか、あらぬ店となりて、寂し

かりし武家町の角に料理屋の軒を並べたるもあいなしや。いで菩提所に詣でて、久しぶりに櫛にても手向けんと辿りゆけば、山門なかば崩れて、一條の汽車道は其の傍を横ぎれり。あまりの變化に驚きてすこし左に曲れば、數百の墓累累として立てり。父君などの墓のうしろには、一步ならぬに粟・黍など秀でたり。一目見るより覺えず目をしばたきぬ。

粟の穂のこゝを叩くな、この墓を。

嬉しきは故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。 (子規隨筆)

加藤武雄

小説家

明治二十一年神

奈川縣生

家の庭

生家は神奈川縣

津久井郡川尻村

である

相模國だが山梨

縣の方へ入込ん

でゐる桂川の峽

谷地方である

五 村の思出

加藤武雄

神嘗祭の頃になると、山茶花の花が咲く。山茶花の花が咲く頃になると、家の庭から眺めやられる國境の連山の頂が斑に雪を置きはじめ。

「お、寒い！ 寒い筈だ。今朝は山に雪が來たぞ。」

さういつて遠山の雪に瞳をあげる心持、あのきつと心がひきしまるやうな新鮮な心持は、山國に育つた人ならば、何人でも經驗するところであらう。

その山の雪が朝毎に白い部分を増していつて、やがて眞白になる頃には、「富士隠し」と私たちが呼びならはしてゐた一際高い峯の肩のところにある富士山が、ひよつこりと額を

のぞかせる。多分光線の工合なのだらうと思ふが、其の頃私たちは、富士山に雪がつもつて、それだけ富士山の脊丈が高くなつたのだとばかり思つてゐた。梯形になつてゐる頂部の一角だけがほんのちらりと見えるだけなので、勿論木朶の花に譬へられるあの全容を髣髴すべくは無かつたが、それにしろ、「おれがの村からは富士山が見えるぞ」と、隣村から來る學校友だちには、それを自分のものゝやうに自慢したものだつた。

が、その富士山も、寒い盛りの三十日か四十日の間、ちらりと額を見せただけで引込んで了ふ。せいびして、ちらと覗いて見た——まあ、さういつた感じなのだ。富士山が見え

なくなる頃には、山々の雪も消え初めて、匂やかな紫紺の山肌が、光を含んだ藍色の空にほのめく。どうかすると、その山々の輪廓が、一抹の夕雲に溶け込んで了ふ。すると、その夜から降り出した柔かな雨が二日も三日も降りつゞく。それがあがると、もう春なのだ。北相模の高原の山裾の村には、かうして春がおとづれるのだ。春が深くなると共に、麥が伸びる。桑が芽を吹く。麥畑、桑畑の間を帯のやうに延びた野道を十二三町、二つ三つの部落と一つの驛とを通りぬけて、その驛の盡頭の高臺にある小學校へ私は尋常を四年、高等を四年、前後八年通つたのである。

私はへんくつな子供だったので、往きにも復りにも、友達の群を離れて一人の時が多かつた。私は一人寂しくその野路をあるきながら、麥笛をこしらへては吹きならした。麥笛——田舎育ちの人は皆知つてゐよう。あの柔かな麥の莖を二三寸の長さに切つてこしらへた小さな笛、唾をつけて吹くと、單調な音を出す小さな笛。私は好んでそれを吹いた。それを吹きく長い野路の盡きるのを忘れて歩いた。私は今でもあの麥の莖の甘酸っぱい舌ざはりをありありと喚び起すことが出来る。その頃の私は、悲みをも、喜をも、寂しさをも、あこがれをも、あの單調な麥笛のしらべの中に、自由に歌ひ出すことが出来たのだつたが——

懸巢
鳩よりはヤム小
形の鳥
かしどりともし
ふ

麥笛で思ひ出したが、まだ、笛にする事が出来るまでに麥が
大きくならないで、黒い土に飛白かすりの模様を置いてゐる頃、だ
から勿論冬のうちの事だが、私たちはよく麥踏といふ事を
させられたものだ。霜柱で根が抜けあがるのを防ぐため、
また、より強く伸びる力を刺戟するために、二三寸位に生え
あがつた麥の芽をわざと踏みつけてやるのだが、その麥踏
の時、土の中から栗の實だの檜の實だのが、ころ／＼と足も
とに轉び出ることがあつた。「こんなところにどうして」と
不思議におもつてきいて見ると、祖父は次のやうなことを
話してくれた。それは、かけすが山から啣くはへて來てそこへ
埋めておいたのだ。かけすはそれを埋める時、空にある雲

薄田泣堇
名は淳介
詩人
明治十年岡山縣
連島町生
樹の實採りが
希臘の女詩人の
詩

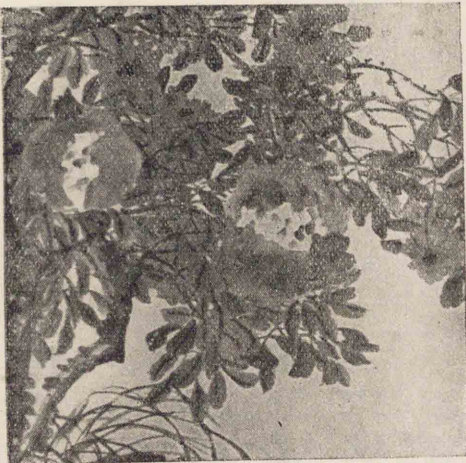
を心覺えにして、その雲の下に埋めるのだが、その心覺えの
雲は、すぐに動き去つたり消え失せたりする。かはいさう
にかけすの奴、折角埋めて置きながら、見附ける事が出来な
いのだ――
私は子供ごころに、心からかけすを憐んだことがあつた。
それは唯、かけすばかりの悲みでは無いといふことを、二十
年後の私はよく知つてゐる。(わが小畫板)

六 石 榴

薄 田 泣 堇

秋は色々と果物が多いなかに、とりわけ石榴は燦爛として
輝いてゐます。樹の實採りが採り忘れたのではない、採る

柿右衛門
肥前國有田焼の
名工
赤の釉薬を發明
した人



ことが出来なかつたので、今日までそのまゝになつてゐる、一番高い枝のてつぺんで紅くなつてゐる林檎の實も美しい。又陶工柿右衛門が見とれたといふ軒端の柿の實も綺麗ですが、石榴の實の美しさには、また格別の趣があります。肌理の粗い陶器を思はせる外殼の肌ざはりも面白いと思ひますが、秋が深くなると、その硬さうな外殼が爆ぜ割れて、内部から紅玉の新鮮な實が零れかゝらうとする味は、とても他の果物には見られない美しさです。陶器にはよく焼割れ

石榴 (筆謙之趣)

藥師寺
奈良縣生駒郡都
跡村六條砂にあ
る法相宗の大本
山
吉祥天
毘沙門天王の妃
身が端止で如意
珠を捧げてゐら
れる

といつて、高い火熱が土の肌^{（大ざ）}に思ひがけない裂目をこしらへることがありますが、その焼割れが陶器そのものゝ瑕にならないのみか、却てその器に豪宕雄大の氣象を與へることがよくあります。丁度そのやうに、石榴の裂口はこの果物に雄大逸宕の味を加へます。裂目は思ひきりくわつと大きく口を開いてゐる程、線の交錯と紅玉の實の割れ加減とが相伴つて一層趣を添へるやうに思はれます。大和の藥師寺に傳はつてゐる吉祥天の繪像は、その古さに於ても、美しさに於ても、名高いものですが、不思議なことに、この天女の寶珠を持つた手の指が六本に描かれてゐます。その理由はどういふ事かわかりませんが、私たちが自

分の掌の上に、木から挽ぎたての石榴を載せる時には、五本の指だけでは、数が足りないやうな氣持がしない事もありません。石榴は火焰の果物です、紅玉の母胎です。一度取落したのが最後、大變な事になりますから。

藍碧の秋の空に、爆ぜ割れた石榴の實が、稍高く懸つてゐるのを見る時ほど、自然の放膽さに、驚異と危険とのごつちやになつた感じを抱かせられることはありません。日光と微風との嘗めるやうな愛撫を見てさへ、いらだたしさと羨ましさを覺えるのもこの時です。どうかしてこれを挽ぎ取らうとする誘惑の抑へきれなくなるのもこの時です。竿は差伸べられます。足は爪立ちしたまゝで、身體中の神



吉 祥 天 女

經は竿の先に集められて、眼となり指となつて光つてゐます。太陽も、青空も、土藏の白壁も、屋根の雀も、路の小石も、草の葉も、みんな瞳を輝かせて竿の先を見つめてゐます。竿の先に挟まれた小枝は手早くへし折られます。その機はすみに、どうかすると、頭の勝つた石榴の實は、くるりと寝返りを打つて向き直つたかと思ふと、翻斗ひんとう打つて眞逆様に地べたに轉り落ちることがあります。外殻は碎け、紅玉の實はばらばらに飛び散ります。美しい果物を潰したといふよりも、もつと貴重な古渡りの赤繪の支那皿を取落して割つたやうな、口惜しさと後悔とをしみじみと味はせられるのはこの時です。(天地讃頌)

夏目漱石

名は金之助

文學者

東京生

大正五年歿

年五十

學校

東京帝國大學

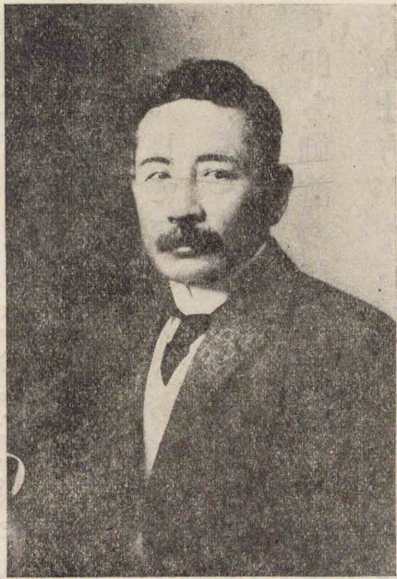
七 髻

夏目漱石

學校を出た當時、小石川のある寺に下宿をしてゐた事がある。其處の和尚は内職に身の上判断をやるので、薄暗い玄關の次の間に、算木と筮竹を見るのが常であつた。固より看板を懸けての表向を商賣でなかつたせゐるか、占を頼みに來るものは多くて日に四五人、少ない時はまるで筮竹を揉む音さへ聞えない夜もあつた。易斷に重きを置かない余は、固より斯の道に於て和尚と無縁の姿であつたから、唯折折襖越しに、和尚の「それや當人の望み通りにした方がようがすな」などと云ふ縁談に關する助言を耳に挾む位なもの

で面と向合つては互に何も語らず久しく過ぎた。或時何かの序に、話がつい人相とか方位とかいふ和尚の繩張内にずりこんだので、冗談半分に「私の未來はどうでせう」と聞いて見たら、和尚は眼を据ゑて余の顔をじつと眺めた後で、「大して悪い事ありませんな」と答へた。大して悪い事もないといふのは、大して好い事もないといつたも同然で、即ち御前の運命は平凡だと宣告した様なものである。余は仕方がないから黙つてゐた。すると和尚が「貴方は親の死目には逢へませんね」といつた。余は「さうですか」と答へた。すると今度は「貴方は西へ」と往く相があるといつた。余は又「さうですか」と答へた。最後に和尚は「早く顯

の下へ髯をはやして、地面を買つて居宅をお建てなさい」と
勧めた。余は地面を買つて居宅を建て得る身分なら、何も
君の所に厄介になつちやみない」と答へたかつた。けれど



夏目漱石

も顛の下の髯と、地面居宅とはどんな關係があるか知りたかつたので、それだけ一寸聞きかへして見た。すると和尚は眞面目な顔をして、「貴方の顔を半分に割ると、上の方が長くつて、下の方が短過ぎる。従つて落ちつかない。だから早く顛髯をはやして上

下の釣合を取る様にすれば、顔の居坐りがよくなつて動かなくなりまゝ」と答へた。余は余の顔の造作に向つて加へられた此の物理的もしくは美術的の批判が優に余の未來の運命を支配するかの如く容易に説去つた和尚を少し可笑しく感じた。さうして「成程」と答へた。

一年ならずして余は松山に行つた。それから又熊本に移つた。熊本から又倫敦に向つた。和尚のいつた通り西へ西へと赴いたのである。余の母は余の十三四の時に死んだ。其の時は同じ東京に居りながら、つい臨終の席には侍らなかつた。父の死んだ電報を東京から受取つたのは、熊本に居る頃の事であつた。是で見ると、親の死目に逢へな

松山に
愛媛縣立松山中
學校教諭として
熊本に
第五高等學校教
授として
倫敦に
文部省留學生と
して

いといつた和尚の言葉も、どうかかうか的中してゐる。ただ鬣の髯に至つては、其の時から今日に至るまで寧日なく剃續けて剃つてゐるから、地面と居宅が果して髯と共にわが手に入るかどうか、未だに判然せずにあつた。ところが、修善寺で病氣をして寢付くや否や、頬がざらざらし始めた。それが五六日すると、一本々々に撮める様になつた。又しばらくすると、頬から颯が隙間なく隠れる様になつた。和尚の助言が十七八年振で始めて役に立ちさうな氣色に髯は延びて來た。妻は、いつそおはやしなすつたらいゝでせう。といつた。余も半分其の氣になつて、頬に其の邊を撫でまはしてゐた。ところが幾日となく洗ひも梳

修善寺
伊豆國田方郡修
善寺温泉

りもしない髪が、膏と垢で余の頭を埋め盡さうとするむさくるしさに堪へられなくなつて、或日床屋を呼んで、不十分ながら寝たまゝ頭に手を入れて、顔に剃刀を當てた。其の時地面と居宅の持主たるべき資格を又綺麗に失つてしまつた。傍のものは、若くなつた、といつて頬に囁し立てた。獨り妻だけは、おや、すつかり剃つておしまひになつたんですか。といつて、少し残り惜しさうな顔をした。妻は夫の病氣が本復した上にも、猶地面と居宅が欲しかつたのである。余と雖も、髯を落さなければ地面と居宅がきつと手に入ると保證されるならば、あの鬣髯は其の儘に保存して置いた筈である。(漱石全集)

八 貢進生

明治になつてから、新設の事業が多かつたが貢進生の制度もその一で、よく時勢に適したものであつた。當時幕府は亡びたが、藩はなほ存して、思ひくの教育を施して居た、統一がなかつた。大學南校は統一を圖つた。全國の秀才を集めて、歐米新進の學問を修めさせた。貢進生は藩を代表するものであるから、自然に競争心を起して勉強せざるを得なかつた。その貢進生を選出させるのに、十萬石以上の大藩は三人、十萬石以下五萬石以上の中藩は二人、五萬石の小藩は一人、十五六歳以上、二十一二歳以下で、學力品行共に

大學南校
明治二年開成所
を改めた名
今の東京帝國大
學の前身の一部

優秀なものと定めた。藩毎に秀才を選んだ。中には情實で選ばれたものもあり、門地で選ばれたものもあるが、貢進生は概して各藩中第一の秀才であつた。貢進生に選ばれることは、當時の青年に取つては此の上もない榮譽であつたに相違ない。

三百の貢進生が大學南校に集つた。幕府は倒れても封建はそのまゝの時代の事として、尊藩におかれては「弊藩に於ては」貴殿は「拙者は」などと、しかつめらしく挨拶しあつた。南は薩摩、北は奥羽、日本の國といふ國から、國訛をその儘もつた青年が出た。散髪もあれば結髪もあり、洋服もあれば脊裂羽織もあり、丸腰もあれば刀を腰にしたのもあり、貴公子

もあれば山猿もあつて、大學南校は小日本の觀を呈した。英・漢・數の三者に通じたものもあつたが、漢・數に通じて英に通じないものが多く、漢にのみ通じて英・數に通じないものもあり、英にのみ通じて漢・數に通じないものもあり、その通じずるにも深淺があつて、學力がまち／＼であつたから、同じ貢進生を十四組に分け、進歩の早いものはどし／＼上の組へ進ませるやうにした。名は大學でも、教へることは中學程度であつた。非常の秀才もあれば、中には到底大學教育を受ける資格のないものも交つてゐた。貢進生三百人の外に、舊來の學生が三百人もあつて、都合六百人。明治五年第一番中學と名が變ると共に、その六百人の中から三百人

開成學校
明治六年大學南校の名から改められた

杉浦重剛
教育家
近江膳所藩士
宮内省御用掛
日本中學校長
稱好塾主
大正十三年卒
年七十一
楠陰
重剛の兄

Handwritten notes in red ink:
杉浦重剛
杉浦重剛
杉浦重剛
杉浦重剛
杉浦重剛
杉浦重剛
杉浦重剛
杉浦重剛
杉浦重剛
杉浦重剛

を選拔し、他の三百人を放逐して、だいぶ粒が揃つた。開成學校となるに及んでは、法學部、理化學部、諸藝學部、鑛山學部に分れ、法學部と理化學部は英語に限り、諸藝學部は佛語に限り、鑛山學部は獨逸語に限るやうにして、稍、大學の形を成した。東京大學となつてからは、附屬醫學部の外、法、理、文の三學部が置かれた。文科が茲に始めて置かれたのである。からえみし業はかはれど、大丈夫の

こゝろ一すぢ、大君のため。

杉浦重剛先生は兄の楠陰先生からこの送別の歌を受けて、明治三年に膳所藩の貢進生として遊學の途に上られた。一人の僕が隨行した。先生は十六歳、僕は十八歳であつた。

琵琶湖の漣はほゝゑんで先生を送つた。品川灣の波は躍つて先生を迎へた。

先生は漢學に達して居られた。又數學にも達して居られた。蘭學なら多少の



剛重浦杉の代時學留國英

た。素養があるが英語の素養が無かつたから、最下の十四の組に入れられた。然るに學力に應じて級を進められたので、十八歳の夏には三の組に進まれた。間もなく二の組に入り、十九歳にははや最上の一の組に入られた。

遵義堂

膳所藩の學校

宇都宮三郎

化學者

小村壽太郎

外交家

日向飯肥藩士

外務大臣侯爵

北清日露の役に

大功があつた

明治四十四年薨

年五十七

長谷川芳之助

鑛業家

政治家

肥前唐津藩士

工學博士

大正元年歿

年五十八

小倉處平

英學者

武人

日向飯肥藩士

明治十年西郷に

與して死んだ

實に非凡な進歩であつた。それには先生の天資もあるが、勉強が一通りではなかつた。

貢進生は寄宿舎へ入れられた。三百人の中に、珍しくも唯一人の舊知の人があつた。それは遵義堂の同役の澤村録之助氏であつた。姓名が宇都宮三郎と改つて、本庄藩の貢

進生になつてゐた。「おや、君か」と互に喜び合つた。宇都宮氏は英語がよく出來たから、一の組にゐた。先生は宇都宮氏に向つて、「一の組では誰が能く出來るか」と問はれると、小

村壽太郎と長谷川芳之助の二人だと答へた。その眼識は誤つてゐなかつた。貢進生の制度を案出した小倉處平氏は、

餂肥藩から小村氏を推薦した。大阪洋學校で、長谷川氏

文章軌範
 七卷
 宋の謝枋得撰
 主に唐宋の古文
 を集めたもの
 八家文
 三十卷
 清の沈德潛撰
 唐宋の文章家八
 人の文を集めた
 もの

に教へた事がある。で、小倉氏は二人に重きを置いた。貢進生入學の當時、小村氏に向つて、「長谷川といふ秀才が來るから、負けてはならぬぞ」と勵ました。又長谷川氏に向つて、「小村といふ秀才が居るから、負けぬやうに勉強しろ」と勵ました。宇都宮氏の見るところも小倉氏の見るところも同じであつた。それが卒業してまでも事實に現れた。入學當時にはこの二人と先生とは甚だしい距離があつた。然るに僅か三年の間に先生はその先輩の秀才に追付いたのである。入學の當時は、始めて英語を學ぶものが多かつた。漢學が既に上達して、文章軌範や八家文をすらく講義することの出来るものが、猿とさうして犬では、馬鹿々々しい上にも、

覺えるに困難であつたから、匙を投げて歸國したのも多かつた。先生はあらゆる困難に打克つて進まれた。教場から歸つて來て、自分の室に入るや否や、すぐ傍目もふらずに、一生懸命に勉強して、唯々一刻も早く他人の上に頭角を見はさうと力められた。多い學生の中には、随分物食ひにゆくものもあり、不潔な場所に入出入するものもあり、散歩運動にかこつけて、あちこちと遊んで歩くものもあつて、先生もその仲間に入らないかと誘はれたこともあるが、一切はねつけて、唯學問にのみ熱中し、夜などは遅くまで燈に對して、雞鳴を聞いてそのまゝ起きて了ふことなども度々あつた。その當時先生と室を同じうしたものが、後になつて、君

には本當に困つた。寢ろといつても寢ず、遊びに往かうといつても往かず、始末が附かなかつた。などと昔話をしたことがあつた。先生は糞勉強家とか、紙魚とか、いろくの綽名を付けられて、遊戯の相談の時には、彼奴は駄目だ。と除物

東風與歲一番新我獨孤清猶守貧

頼有床頭四君子悠然迎得古稀春

甲子新年 〇六

天台道士

杉浦重剛筆

筆蹟

東風與歲一番新

我獨孤清猶守貧

頼有床頭四君子

悠然迎得古稀春

甲子新年 〇六

天台道士

にされて居た。先生は一向頓着せず、却てそれを有難く思つて、一心不亂に勉強された。當時辭書は不完全で、講義録などといふものはなく、参考にしようといふ外國の書物は

來てゐなかつたから、先生の苦心は一方でなかつた。

先生の學資はといふと、開成學校有名三幅對に、先生は宮崎道正、磯野徳三郎二氏と共に、無産三幅對に入れられたほどの貧書生であつた。學校から僅かの小遣を支給される外國元から仕送を受けるなどの便宜は更に無かつた。明治四年、廢藩置縣と共に貢進生の制度も止んで、先生の學資は全く絶えた。先生は後に大津縣參事になつた榊原專藏氏に頼んで縣費生になられたが、五年八月に至つてそれも止つたので、本多家の家扶の某氏から金を借りて學問を續けられた。幸にも學校で給費生を設けたので、先生は貧窮の旨を述べて給費生となられた。

宮崎道正

理學者

磯野徳三郎

化學者

高等師範學校教授

榊原專藏

名は豊

膳所藩士

明治三十三年歿

年六十四

本多家

膳所藩主

岡村輝彦
法學者
法學博士
辯護士
上總舞鶴藩士
安政二年(三五)生

西松二郎
礦物學者
高等師範學校教授
肥前長崎生
明治四十二年(五七)年五十五

増島六一郎
法學者
法學博士
辯護士
近江彦根藩士
安政四年(五七)生

貧窮生は先生の外にも多かつた。發達盛りの青年時代には、誰も三度の食事だけでは満足出来るものではないが、間食しようにも、するだけの餘裕が無かつた。先生が第一番中學に在學の頃は、學校の近くに住んでゐられた兄の楠陰先生が、毎夜飯と澤庵を陶器の辨當入に容れて先生に贈つてくれた。その辨當が來ると、岡村輝彦氏だの、宮崎道正氏だの、西松二郎氏だの、増島六一郎氏だのといふ連中は、餓鬼道の亡者のやうに寄つて來て、箸の廻るのをもどかしがつて、いきなり手摺にして、「旨い〜」と喜んだ。

一夜、先生は宮崎・岡村諸氏と集つて話してゐるうちに、腹が減つて堪らぬので、皆の懷中を調べたが、誰も一文もなかつ

穂積陳重
法學者
法學博士
男爵
樞密院議長
舊伊豫宇和島藩士
大正十五年(二七)年七十二

た。そこで疊を上げたり、床の上を搜したりして、やつと三錢を得て、焼芋を買つたといふやうな話もある。

着物は唯一枚、夏は單衣にし、冬は綿入にして着られた。洋服は學校から支給されることになつてゐたが、金が無いので、破れても修繕することが出來ず、破れたまゝにして置かれたから、チヨッキの横が摩り切れてしまひ、上衣を着たままチヨッキを引抜くことが出來た。杉浦のチヨッキといつて、當時學生間に有名であつた。(杉浦重剛先生)

九 杉浦重剛君を弔す 穂積陳重

謹んで杉浦重剛君の尊靈に拜告す。

不肖陳重は君の數多き友人の中で最も古く且最も親しく交誼を辱うしたる一人として、推されて友人を代表し、茲に靈柩の前に拜伏して、幽明別離の辭を述べべき、最も悲しき役目を負ふことになりました。

回顧すれば、私が始めて君と相知るに至つたのは、明治三年、朝廷が諸藩に令して貢進生を徴し、大學南校に入らしめた時でありまして、今を距ること實に五十六年の往時であります。君は膳所藩の貢進生であり、私は宇和島藩の貢進生であり、殊に年齢を同じうし、學科を同じうして居りました。貢進生の年齢は十六歳より二十歳まで、ありましたが、君は當時十六歳の青年で、生徒中の最年少者であつたにも拘

驥尾 類淵 驥二篤學一
附二驥尾一而行
益顯九(史記)

牛耳 盟主の意
諸侯盟誰執二牛耳一(左傳)

らず、其の人格の高邁にして、已に自ら成人の風があり、殊に漢學の素養が最も深かつた爲に、嶄然頭角を見はして、夙に儕輩の推重する所となり、慷慨氣節を尙ぶの青年は、同氣相求め、期せずして君を中心とし、校中に一團をなし、或は言論に、或に文章に、又時としては青年客氣の餘、誤つて實力に訴へ、只管士氣の振作と校風の廓清とに努めたものであります。私共舊友も、その驥尾に附し、當時君との交友に依つて受けた感化は、私共の生涯に極めて深い印象を遺したといふことを自覺するものであります。此の如く君は青年の學生時代に於て、既に儕輩の間に牛耳を執り、身を以て範を示し、氣を以て事を行ひ、至誠人を動かすの素質があつて、後

に育英を以て事業とせらるゝの兆は、既に當時に現れて居つたのであります。

其の後明治九年に、私共は君と共に文部省留學生として英國に派遣せられ、留學數年間は起居を共にしたことが多くありましたから、君の精神上知識上の感化を受けたことが殊に多くありました。君は蒲柳の質を以て過度の勉學をせられたために健康を害せられ、滿期前に歸朝せられ



杉浦重剛

蒲柳
松柏之姿、經霜猶茂、蒲柳之姿、望秋先零。(世説)

今
大正十三年二月十六日葬儀の日

ましたが其の後君が畢生の獻身事業とせられた育英のことに對しては、前に述べた君の獨得の性格は、君をして他に比肩者なき適任者たらしめました。其の功績の顯著なるは固より當然の事であります。しかしながら君の育英事業の功績と皇室及び國家社會に對する勳功とについては、世人の夙に周知する所、又此の式場に於ても他の人々より述べられる所でありますから、茲には之を省きます。只私共友人はかゝる崇高なる人格者を友とし得たることを畢生の欣幸とするにつけても、之と別るゝを悲しむの情の一層切なるを感ずる次第であります。今君に別を告ぐるに當つて想ひ起すは、曾て南校時代君と

トラファルガル
 イスパニヤの
 西南海岸の岬
 一八〇五年十
 一月二十一日
 Nelson (1758-1805)
 イギリスの
 水師提督
 Trafalgar
 ネルソンの英
 國艦隊が佛伊
 の聯合艦隊を
 破つてナポレ
 オンの英國侵
 入を挫いた處
 Nelson
 (1758-1805)
 イギリスの
 水師提督
 神に謝す
 Thank God, I have
 done my duty.

共に始めて英國史を學び、トラファルガル海戦に於けるネ
 ルソン提督戦死の條を讀んで、共に感想を語り合つたこと
 であります。ネルソン提督が敵艦に致命の重傷を受け、死
 期將に迫らんとするの刹那、敵艦隊全滅の報を聞いて、神に
 謝す、我は我が務をなせりと叫び、莞爾として瞑目した條に
 至り、感慨無量、君と相語つて、最期の瞬間、我は我が務をなせ
 りと公言して死することを得るのは、人生理想の極致であ
 ると言ひました。後にも此の事を想ひ出しては互に話し
 合つたことがありましたが、今私は君が正に最期の瞬間に
 於て此の言を發し得た人であつたことを喜ぶものであり
 ます。君は事柄こそ違へ、近年或はトラファルガル海戦の

徳富健次郎

號は蘆花

文學者

熊本縣水俣町生

昭和二年歿

年六十

逗子

神奈川縣三浦郡

逗子町

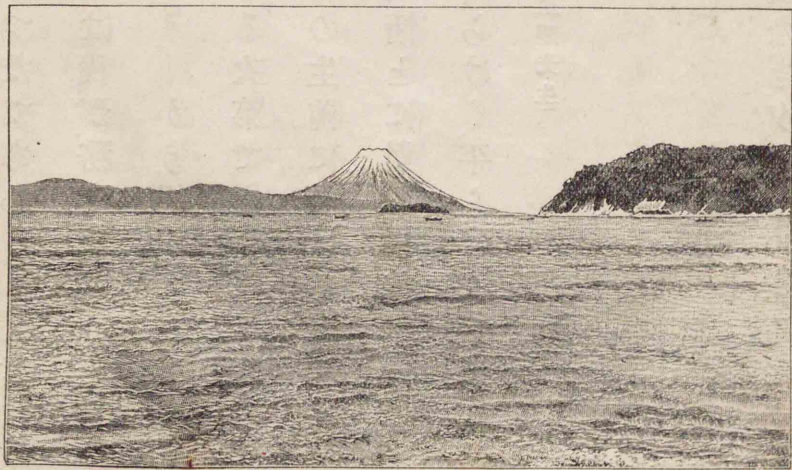
如き一大事と考へたこともあつたであらう。又君は重き
 病床に在つて、必ず「神に謝す、我は我が務をなせり」と言ひ、莞
 爾として永眠に就いたであらう。かう思つて、私共友人は
 聊か別離の悲哀を慰むる所ある次第であります。
 今私は君の友人一同に代り、君の生前に於ける多年の感化
 指導と終始渝らざる温かき友情とに對し、最後に厚く御禮
 を申上げ、君の在天の英靈が安らげく、平らげく、長へに鎮り
 まさんことを祈ります。 (杉浦重剛先生)

一〇 相模灘の落日

徳富健次郎

秋冬、風全く凪ぎ、天に一片の雲なき夕、逗子の海濱に立つて

伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべし（か）とは思はれず。日の山に落ちかゝりてより、その全く沈み終るまで、三分間を要す。日の西に傾くや、富士を始め相豆の連山、煙の如く淡し。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、次第に紫となる。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌



返子海岸

に金煙を帯ぶ。此の時濱に立つて望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山といはず、砂といはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。かゝる風、夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に待する感あり。莊嚴の極、平和の至。物あり、融然として心に浸む。喜といはんは過ぎ、哀みといはんは未だ及ばず。已にして日愈、落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちに藍色に變ず。唯富士の巔、舊に仍つて紫の上に更に金光を帯ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み始めぬ。日一分を落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧みがちに、悠々として落ちゆく。已にして残り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、忽ちにして無し。眼を上ぐれば世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。而も餘光の忽ち箭の如く上射し、西空の金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿せる後、實に斯の如し。日の落ちたる後は富士もほどなく蒼ざめやがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃き藍色となり、日の遺孽とも思はるゝ、明星の次第に暮れゆく相模灘の上に

眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。

(自然と人生)

佐々木信綱

歌人

國文學者

文學博士

明治五年三重縣

生

岳州

支那湖南省岳州府

蘆のまる屋
夕されば門田の
いなば音づれて
蘆のまる屋に秋
風の吹く
(金葉集、源經信)

一一 月の洞庭湖

佐々木信綱

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に立つてゐる三層樓である。城壁の甃瓦は幾百年の風霜に黒ずんでゐる。建てなほしてまだ久しからぬ岳陽樓は金碧燦爛として耀いてゐる。その色彩の配合が極めて美觀である。船をすてゝ上陸すると、岸邊のこゝかしこに小屋がある。それは「蘆のまる屋」とでもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いた低い家である。その間を通りぬけて高い石段を上り、城門

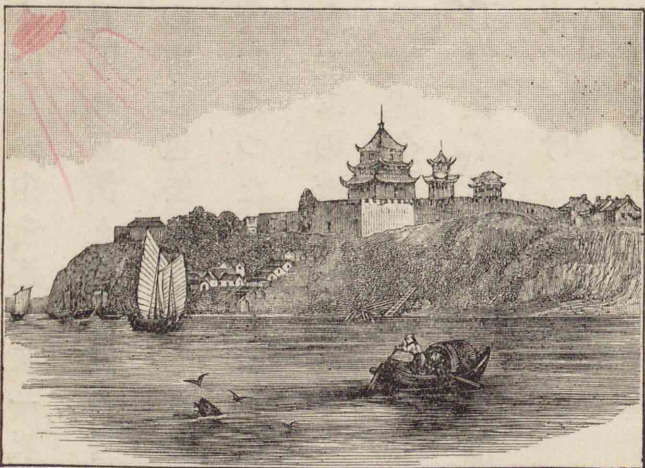
范文正公
宋の宰相范仲淹
の諡（六四九一七一
二）

浩々湯々
衡、遠山、香、長
江、浩々湯々、横
無、際涯、朝暉
夕陰、氣象萬千。
此則岳陽樓之大
觀也。（岳陽樓
記）
江の島
神奈川縣鎌倉町
の西一里餘にあ
る小島

をぬけて岳陽樓を訪うた。案内の僧に導かれ、壁に題した詩や、聯の句などを讀んで三層樓の上に登つた。かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り世は遷つても、天然の景には變遷がない。唯見る、浩々湯々、湯、洞庭湖は目の前に天地の大幅を廣げてゐる。湖の門戸には彼の堯の女湘君がゐたといふ君山が右に、扁山が左にある。どちらも江の島位の島で、さながら洞庭宮を守る獅子狛犬である。夕日は今や其の眞中に落ちようとしてゐる。天地の大觀に覺えず吾を忘れて眺めてゐたが、促し立てられて船に歸つた。幸に風は追手。帆を張つて愈、洞庭湖を横ぎらうとする。

洞庭七百里
犁雲の句

瀟湘八景
平沙落雁
遠浦歸帆
山市晴嵐
江天暮雪
洞庭秋月
瀟湘夜雨
漁村夕陽



樓 陽 岳

夕日は二つの島の間に落ちて、見る／＼紅の眞玉が湖心に沈む。顧みれば岳州府城の上には月は昇る。さながら、洞庭八百里、月照岳陽城といふ句をそのまゝ。日を數ふれば恰も舊曆十月十五日の夜である。かの瀟湘八景の一なる洞庭秋月ではないが、望月の夜、洞庭を過ぎるとは、何といふ好因縁であらう。その餘光が空に耀くや空の色

皓月千里
「岳陽樓記」中の句

は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、晝にも寫し難く麗しい中を、遙かに一帆又一帆。風のまにまに遠く、近く、且顯れ、且消える。其の言ひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだならばと思はれる。美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。月は愈、澄みのぼる、見えるものは唯黄金白銀の波。「皓月千里、浮光躍金」といふ有様である。

月は良く、風は追手。船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふける、月は愈、澄む。此の意人の識るなし。言ひ知らぬ楽しさ、寂しさ、何とも言ひ難き感が胸に充ちて、我が身坐るに我あるを知らず、此の隈なき月と果なき湖とに對して

みた。一昨年の初秋、富士に登つて、絶頂に見た七月十七夜の月。彼は山頂、此は湖上。併し、あはれは同じあはれで、風月の縁に富むことを天に謝したことであつた。重なる（帝國文學）

一二 灯を消して

櫻井忠温

それは明治三十七年十一月二十八日の夜であつた。

參謀部の電話のベルがけた、ましく鳴つた。

「おうい、何か。」

と、受話器を耳にあてながらかういつたのは、白井中佐。

「俺か、俺は白井ぢや、貴様は齋藤か。」

「ふん、又失敗か。何！ 乃木少尉、戦死した！ 戦死した

櫻井忠温
陸軍歩兵大佐
明治十二年愛媛
縣生
bell 電鈴
白井中佐
名は二郎
乃木軍の參謀
後陸軍中將に累
進した
齋藤
名は季次郎
後陸軍中將に累
進した
乃木少尉
名は保典
乃木大將の次子
友安旅團の副官

將軍
第三軍司令官陸
軍大將乃木希典

のか？ どうして……傳令中に。さあ、それを將軍に言はんといふわけには行くまい。よし、何とかするよ。うん、うん、もう一度夜襲する。よし、弔合戦をやつてくれ、さよなら。」

かういつて電話が切れた。



乃木保典 同 勝典

寒い風が闇の中を吹いてゐた。

白井中佐は受話器を手から離しもしないで呆然としてゐた。眞黒な帷が彼を包んでしまつた。窓の外には、ひゆうくと

時計を見ると、もう九時に近かつた。

中佐はどうしようかと考へた。しかし、第一戦況の報告もしなければならぬので、中佐は思ひ切つて、大將の部屋へはひつて行つた。

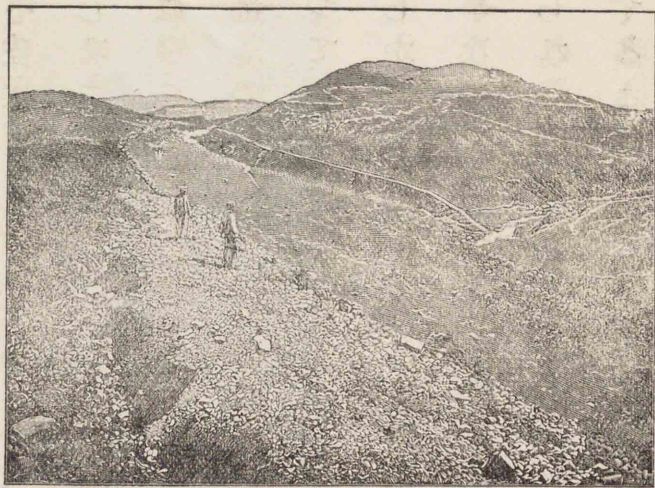
部屋の中は眞暗であつた。大將はもう休まれたのかと思つて、一寸躊躇した。

しかし、大將が火もつけないうで部屋にゐることはいつもの事なので、別にそれを怪しみもしなかつた。休んでゝもゐられるのかなと思つた。すると、暗い中から「だれかい」といふ聲がした。

「はい、白井であります。」

「さうか。何か用か。」

マッチ
Match
燭寸



「戦況を申上げに……」

かういふと、ばちつとマッチ

ニが点つた。大將の顔が蒼白

百く光つた。大將は蠟燭に火

三をつけた。蠟燭のしんが、じ

高 いじいと音を立てた。

地 「戦況といふと……」

「二百三高地でございます。」

「うん、どうだつたな。」

「遺憾ながら、又失敗に終つたと齋藤參謀から言つて來ま

した。」

「さうか……死傷はどのくらゐあつたな。」

「はまだ、はつきり分らぬと思ひますが、すぐ調べまして……」

蠟燭の火に照された大將の蒼い顔を見ると、それ以上のこ

とは、中佐の口から漏しかねた。

大將はじつと灯を見つめたまゝ、何ともいはないでゐた。

中佐は大將の顔をうちまもりながら、涙がこみ上げて來た。

そして、手足がぶる／＼と震へた。

「死傷者をよく調べて下さい。」

大將は思ひ出したやうにかういつた。

「はい。」

「もうそれだけかい……」

「それに閣下、閣下の御令息は戦死されました。」

中佐の口から我ともなしに吐き出された。何だか大将から引出されたやうに。

「何……保典が……さうか。」

かういふと、大将は、ふいと蠟燭の火を消してしまつた。

そして、體がアンペラの上に倒れたやうな音がした。

中佐は足を忍ばせて外へ出た。

ごうくといふ風の音が、窓の外を通りすぎた。 (將軍乃木)

一三 東國武士

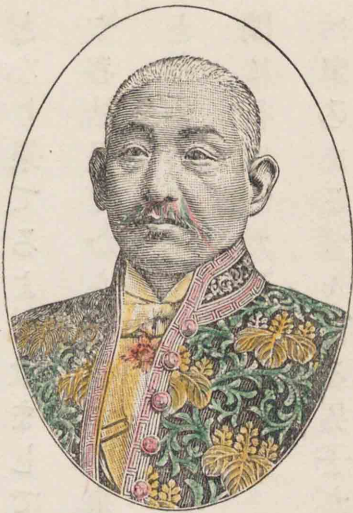
萩野由之

アンペラ
アンペラ草の莖
で編んだ筈
萩野由之
國史家
文學博士
東京帝國大學名
譽教授
新潟縣相川町生
大正十三年癸卯
年六十四

武勇な氣風の盛な時代には、何處の國にも、決闘がはやつた。決闘とは命がけの喧嘩である。人の生命は君國の爲にこそ毛よりも軽いが、個人同志の意地張の爲にあたら生命を棄てるのは愚の至である。尤も卑怯の舉動をなし、臆病者となり果てるよりはましてあらうが、畢竟は、血氣の勇にはやる結果だから、賛成が出来ない。

とはいへ、日本の平安時代に於て、この決闘が或種の人々の間に行はれた事は面白い。殊に平安時代は、京都の方面には、鬻のある堂々たる男子が女の眞似をして、弱々しい氣風が漲つてゐた時代であるのに、關東方面の一部に此の氣風があつた事が面白いのである。

そして此の氣風が練れに練れて、遂に弱々しい、元氣の無くなつた日本を改造して、氣骨のある新日本を現出した事に



萩野由之

思ひ到れば、又頼しい所がある。今こゝに其の決闘の顛末を語らう。

武藏國に箕田源二源宛といふ者があつた。これはかの

有名な武將源頼光の四天王の一人といはれ、又羅生門の鬼を切つたと言ひ傳へられてゐる渡邊綱の父である。又、下總國に村岡五郎平良文といふ者があつた。これも四天王の一人碓井貞道の父である。兩人とも武勇の譽の高かつ

源頼光
滿仲の子
治安元年(六六二)卒
頼光の四天王
渡邊綱
坂田金時
碓井貞道
卜部季武

た人で、共に東國に居る所から、互に武勇に於て劣るまいと、常々競争してゐたのであつた。

然るに箕田の家來の中におしやべりの奴があつて村岡に向ひ、「私の主人はあなたを侮つて、村岡が如何に勇氣があらうとも、逆も自分に手向ひのなることではない」といつてゐます。」と告げたから、たまらない。良文の方でも、だまつてはゐない。「箕田殿の腕前は此方も知つてゐる。さやうに思はれるなら、然るべき野原をえらんで決闘させう。」と箕田へ申込んだ。かく申込まれては、箕田源二も否應はない。「宜しい。承知しました」と、日は何日、場所はしかつゝの處とまで約束が成立した。

約束の期日は来た。雙方共に部下の人数五六百人ばかりを従へて、所定の野原へ到着したのが、かれこれ午前十時であつた。兩陣の間隔は一町ばかり。雙方共に主人のために身を捨て命を惜まぬ血氣の青年、一列に楯を突きわたして陣所を固めた。

かゝる場所には、先づ雙方から兵士を出して決闘開始の申合をなし、其の兵士が各の陣に歸る時に、雙方から矢を射かけるのが例で、その矢の飛ぶ中を、馬をかけさせず、見返りもせず、静々と我が陣所へ引返すのがえらい事になつてゐる。そして後に兩陣から矢を放つのを射組むといつて、之を開戦の式とするのである。

雁股の矢
矢尻が二股になつてゐる矢



雁股の矢

然るに良文は、此の開戦の始に使を宛につかはして、今日の決闘は、平常するやうに射組むことは面白くない。君と我が輩とが各の手腕を試みるためであるのだから、たと二人だけで馬を乗出して、腕のかぎり射ようではないかと申し送つた。宛はいかにも同感でござる。といつて、たゞ一騎陣番へて突つ立つた。良文は之を見て大いに喜び、家來共に向ひ、貴様たちは見物してゐよ。我が輩が射落されたならば、その時は死骸を取片付けよ。と言ひすて、これもたゞ一騎雁股を執つて走らせあつた。最初の矢は雙方共に中らなかつた。二度目の矢をば必ず當てようとは互に思つて

股寄
 雨覆ひ
 腰當
 帯
 旅の倒れぬやう
 に上からしめる

ゐたが、何さま名人と名人との手合せであるから、良文の放つた矢は、宛が馬を馳せちがへて之を避ける。宛が放つ矢をも、良文はうまく避けて中てさせない。三度目には、今度こそと、互に敵の胸板目がけて放つた。敵は馬から落ちるやうにして矢を避けたから、良文の矢は宛の太刀の股寄の處へ中つたばかりで、からだには些の傷もつかなくつたし、宛の矢も良文の腰當に中つたばかりで、からだには達しなかつた。こゝに於て、良文は宛にむかひ、「お互に、射る矢は決してそれる矢ではござらぬ。もはや互の手練の程は見えた。のみならず、此の決闘は意趣遺恨といふのでなくて、たゞ一時の

意地張からのことであれば、お互に殺しあふにも及ばぬこととござる。なんと決闘はこれでやめようではござらぬか。といった。すると宛は早速之に同意して、「我が輩とでもさやうでござる。最早お互の手腕は明白でござる。いざ引返さう。」といつて、決闘をやめた。之を見てゐた雙方の兵士は皆大息を吐きつゝ、「我が主人たちの馳せ組んで射合はれる所を見ては、今は射落されるか、今は射落されるかと思ふと、ひやくして氣も心も顛倒し、自分が決闘して生死を賭するよりは却て恐しかつた。」と、胸なでおろして語り合つた。此の決闘の後、宛と良文とは互に仲善しになつた。以前よ

市原野
古の襟原郷
今の京都府葛野
郡松尾村の地

北原白秋
名は隆吉
詩人
明治十八年福岡
縣柳河町生

りも懇意になつたのである。兩人がかゝる動機から懇意になつたので、其の子の綱も貞道も、共に源頼光に従つてその部下となり、相共に四天王の中に數へられるやうになつたのであらう。頼光が市原野に兇賊鬼童丸を退治した時、綱と貞道とは共に従つてゐたのである。要するに、此の頃の決闘は實に堂々たるもので、少しも卑怯な眞似をせず、如何にも男らしくやつたものだ。義理を重んじた我が國特有の武士道も、こんな所から次第に發達して來たものであらう。(史話と文話)

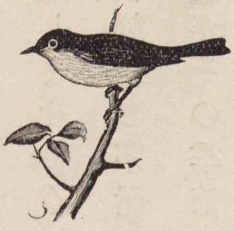
一四 豆柿と小禽

北原白秋

ベッド
Bed

地震
大正十二年の關
東地方大地震

この頃、毎朝ベッドの上で目がさめると、きまつて、私は此の長方形の硝子窓に目を留める。まだ緑がちの孟宗の光とそよぎとを背景にして、赤い豆柿が五つ六つ、つい近くへとどいた小枝の岐れに動いてゐる。胸毛の青い目白が一二羽、きつととまつてゐるのである。あるものは頭をうつむけにして、しきりに實をつゝいてゐる。ともすると、その大きなベッドには坊やがぼかんと坐つてゐることがある。はひつてゆくと、これも亦柿の實の目白を見入つてゐるのである。この豆柿は家の後ろの丘の竹藪の下にある。その幹は庇の中に取込まれてゐたが、地震で庇を引きもがれて



忠 白

了つた。去年の地震はこの家の家根や庇の赤瓦を一つ残らずふるひ落して了つた。その後の二秋ふたあきの豆柿の赤さはまた格別になつた。

この豆柿は、此處へ始めて居を卜して以來、いつも私の秋を樂しませてくれた。この洋館を建てる前には、この豆柿は朝鮮式の茅屋の奥の二疊の書齋の西の窓から仰がれた。だが、その季節になると、寺の和尚やかみさんがはひつて來ては、叫びながらみんな竹竿ではたき落して了つた。この煩はしきは、どれだけ私の靜思と讀書とを妨げたか。私はそれを見ていつも障子を閉めたが、心は平かでなくなつた。見て樂しみたいものを傍からはたき落される不快さはと

此處
神奈川県小田原町

にかくとして、妄にこちらの屋敷内のものを我が物顔に始末されるのが、——それに、あまりに騒がしい人の心を見、聲を聞くのが苦しかつたのである。地代を拂つて住んでゐ



鶉

る以上、たとひ地主でも、かうした心なき闖入を肯定したくはなかつたが、怒つたところで仕方がないので、この次からは柿の實の代は別に拂ふことにした。それからからは、私の書齋生活もしつとりと落ちついて來た。目白がこぼれるやうにやつて來た。鶉も來た。百舌も頬白も小雀も來た。ねんごろない、秋になつた。小禽たちはつやくと熟した赤い實を一つ一つ丹念に枝を揺り揺

り啄んで遊ぶ。その食べたあとには、べらべらの皮だけが一つくひつかつたまゝに残されてゆく。たまゝ熟し過ぎて地に落ちると、それは鼠がちよろくと、後先に競つて嘗めに來るか、かへて草もみぢや嫁菜の花の間をもぐりくゞつて行くかした。小禽と鼠との供養の柿、そのうへの冬晴の空、全くこの家の空はさむくとして、而も朗らかであつた。

その後、朝鮮式の小さな茅屋は西の竹藪の前に移されて、その在つたところにこの洋館が建つたわけである。さうして、豆柿の枝が寢室の硝子窓につかへて來た。赤い實の點々も。

地震で裏の湯殿や洗面室の庇が大破した後の去年の秋は、階下からも廊下からも、仰ぐと、柿も小禽もその破れた間から樂しまれた。南の庭へかゝんでも、家の内から見通しに、明るく美しく反射してゐたものである。今年は壞れたその差出しの庇を下から一切取除いたので、なほさら明るくなつた。下手の茅屋の小窓からは、またよく私や子供が面を突き出して仰ぐ。

小禽は一日中ひつきりなしに群れて來る。やはりこぼれるやうに枝移りするの目白である。こちらの細枝からつい向ふの實をつゝきながら、落ちさうになるものもある。うつむいて頭を突込むのもあれば、横から細い嘴を立てる

のもある。目白は小さい。それは時として鴨でも來れば、實にその鴨が大きく見えるほど目白は可憐に小さい。青と萌黃の小禽。この豆柿に來る目白は人をすこしも恐れないうで、いかにも自分の樂みを樂みとしてゐる。遊び惚れ啄み惚れてゐる。だが、鴨は藪の向ふにばかり騒いで、はたはたと柿へ移ると、啄む間もなくまた藪へ逃げて了ふ。人影さへ射せば、もう落ちつけないのである。鴨が來ると、目白が散る。しかし二羽三羽はまだ残つて、つましくつゝいてゐる。百舌が來ると鴨も目白も逃げる。百舌は柿の實よりも、弱い小禽を襲ふのである。見てゐると、小禽の生活も楽しいやうで、なかく安心もしてゐられ

なさうである。それはさびしい。

それはとにかくとして、豆柿の赤いうちは小禽も樂しいであらう。おそらく、こゝらで残された赤い柿はこの藪かけの一本だけだらうと思ふ。それほどよその野山は目もかれて來た。

豆柿と小禽。私はよく地べたへ降りると、空を仰ぎ惚れる。たま／＼遊びに見える詩歌の友も、ほれ／＼と小禽の行ひを眺め入つては、「これはいゝ」といふ。(季節の窓)

一五 有情十首

齋藤茂吉
醫學博士
歌人
明治二十五年山形縣生

齋藤茂吉

春雨をきゝつゝ居れば、さよふけてさびしき馬の
足搔はきこゆ。

太田水穂

太田水穂
名は貞一
歌人
明治九年長野縣
生

わが庭の脊低青垣葉ごもりにおもかげ見えてな
ける鶯。

長塚節

長塚節
歌人
茨城縣生
大正四年歿
年三十七

鳴きかはす二つの蛙、一つやみ、一つまたやみぬ、我
もねむくなりぬ。

吉井勇

吉井勇
歌人
明治十九年東京
市生

淺草の鳩も寂しくおもふらん、日ごと見なれしわ
れを見ぬため。

與謝野寬

與謝野寬
號は鐵幹
歌人
慶應大學教授
明治六年京都市
生

眞黒なる大煙突のやゝうへに、一羽の鳶のほろほ
ろと鳴く。

北原白秋

木の枝に雀一列ならびゐて、ひとつびとつにも
いふあはれ。

木下利玄

木下利玄
子爵
舊備中國足守藩
主の息
歌人
大正十四年歿
年四十

金魚草に蜻蛉とまりて、金の眼を日にまはすとき、
午砲のとゞろく。

窪田空穂

窪田空穂
名は通治
歌人
明治十年長野縣
生

ふるさとにきゝにし蟲の、かすかにもまじりてな

若山牧水

名は繁

歌人

宮崎縣生

昭和三年歿

年四十四

若山牧水

くよ、蟲賣る家に。

枯草にわが寝て居れば、あそばんと来て顔のぞき
眼をのぞく犬。

金子薫園

金子薫園

名は雄太郎

歌人

明治十年東京市

生

霜月の長夜を寒み鷗なく、一羽がなければ、また一羽
なく。

一六 伊吹山

徳田秋江

徳田秋江

名は浩司

文學者

明治九年岡山縣

生

伊吹山

滋賀縣と岐阜縣

との境に聳えて

ある山

標高四五二四尺

「あゝ、伊吹山が見える。」と私は思はず獨語した。
すると、傍に横臥して居た骨董屋は、むつくと起き上りつゝ、

窓に顔を向けて、

「あゝ、これが伊吹山ですか。」と言葉をかけた。

「えゝ、伊吹山です。好い山だ。」私は感嘆の聲を放つた。

さういふうちにも、山の全身が車窓に向つて満幅の繪畫を
展開して來た。

「なるほどこれが伊吹山ですか。よく伊吹といふことを
聞いてゐたが、今日はじめて見る。」

「好い山だ。今日はまた不思議にはつきりと見える。」

私は重ねて感歎の聲を洩した。全く今日ぐらゐ伊吹山を
よく見たことは、二十何年の間幾度か此處を往復してゐな
がら始めてとあつた。

伊吹山。何といふ記憶に懐かしい山であらう。私の幼年時代から少年時代に至る間の修養と趣味とは、常に日本の歴史とその史蹟に關聯した地理とにあつた。私がこの伊吹山を覚えそめたのは、平治の亂に一敗地に塗れた源義朝が、義平・朝長・賴朝の三子を連れ、わづかに鎌田政家等二三の家の子郎黨に擁せられて、東國をさして落ちゆく途中、雪の爲に父子相失ひ、今年やうやく十三歳になつたばかりの賴朝が只一人尾張守平賴盛の家人宗清に捕へられて、六波羅の屋敷に引いて行かれた條で、それがどんなに私の哀感をそゝつたことであらう。私はそれをよく記憶してゐて、自分が十九の年始めて上京するときには、汽車の窓からこの

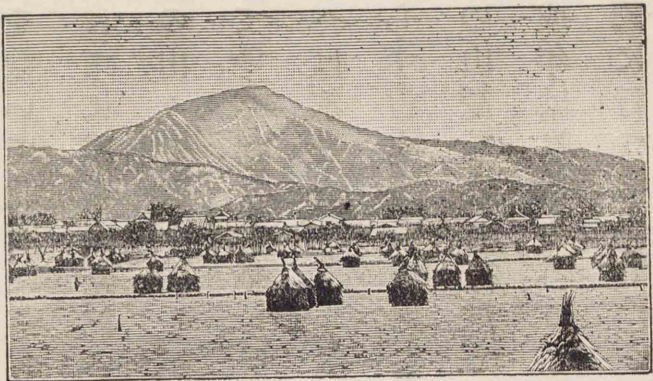
平賴盛
忠盛の子
清盛の弟
宗清
彌平兵衛平宗清

逢坂の關
古の關所
山城と近江の國
境にあつた

不破の關
古の關所
岐阜縣不破郡關
ヶ原町にその遺
址がある

伊吹山を眺めることを忘れなかつた。都を離れ、失意の心を懷いて北國に落ち行く人、或は東山道を経て遠き奥州のはてに歸る人、逢坂の關を越えて湖水のあなたに比良・比叡の山々を遠く顧みがちに近江路を行く間は、まだ後ろにしてゆく都の名残も偲ばれた。一度不破の關を過ぎてしまへば、都はいよゝゝ雲居の空に遠ざかるばかりである。知らず、古來幾人か感傷の眼を擧げて山頂の雲を眺めず、この山麓を過ぎ得たであらう。或年は晩秋・初冬のころ私はこゝを通つた。それは遠い外國に行つてゐて亡くなつた兄を弔ふために歸國して、再び東國に歸る時であつた。雪模様の灰色の雲は低く垂れて、

中央線
名古屋市長野縣
山梨縣東京市を
連絡する鐵道線
路



伊吹山

黄褐色にうら枯れた伊吹山は、憂鬱な空の表にはつきりと
浮び出てゐた。

また或年は、夏のをはりの時分こ
こを通つた。その時私は中央線
によつて名古屋に出て、漸く日の
暮れそめるころ濃尾の平野をと
ほつて行くと、名古屋あたりから、
蒸すやうに暑かつた大空は一面
に墨を流したやうにかきくもつ
て、千頃の青田にもものゝしい嵐
と思ふ間に、大粒の雨滴は早くも横

がさつと波を揚げた。

大垣
岐阜縣大垣市

ざまに車窓を打つて來た。風はますます強く吹いて、やが
て銀箭の如き急雨は沛然としてやつて來た。その篠つく
雨の音の中を、列車は轟々と響をあげて駛つて行つた。そ
して大垣を過ぎる頃には、さしもの豪雨もいつしか止んで、
沿道の草木は眞青に洗ひ清めたやうな艶な濡れ色を見せ
て、雨氣を含んだ冷かな風が、開け放つた窓を流れるやうに
吹いた。その時車窓の遙か彼方に伊吹山の雄姿を認めた。
その方の空には、まだ降り足らぬやうな凄じい夕立雲が黒
く鎖して、漆を流したやうな嶮しい伊吹山は、夕闇の中に、人
を脅しさうに聳え立つてゐた。私はその雨後の伊吹山を
も忘れることが出来ぬ。

今日はまた珍しく春の日の光の中に、氣象の加減で稍距離を置いて、淡藍色に染めなされて、明媚な姿を示してゐる。
 「好い山だ。うん、繪の通りだ。すつかり繪になつてゐる。骨董屋はしきりに感歎して眺めてゐる。列車はその山麓をめぐり、やがて次第に西北の遠い霞の中に山を残して過ぎ去つた。

私はその山の影が見えなくなるまでも、長く／＼目送してゐた。 (車窓)

一七 甲賀孫兵衛

大町桂月

「やよ孫兵衛近う寄れ。汝を男と見て頼みたきことあり。

大町桂月
 名は芳衛
 文章家
 高知縣の人
 大正十四年歿
 年五十七

わが爲に弟なる式部を人知れず暗殺してくれよ。」

と、稻葉丹後守はその臣甲賀孫兵衛を呼びて命令しけり。孫兵衛といふは、年僅かに十六歳なる少年なり。家臣も多かるべきに、他のものには命ぜられず、ひとり男と見られ、かかる重大なる祕密を打明けて大任を負はせられたる孫兵衛、年は若けれども、たしかなる男、膽玉のある男、腕のある男なりしことは問はずして明かなり。されど、主君の弟君を暗殺せよとは、餘りに意外なる命令なり。

「驚くは無理ならず。されど、汝も知る如く、式部の驕心亂行、とても生かして置くべきにあらず。現在血を分けた

る弟なり。いかにもして人一人前のものにしてやりたしと、心を碎き言葉を盡して諫め誠めたること幾十度なるを知らず。されど理非を辨へぬしれもの、わが眞心こめたる訓戒は、馬の耳に念佛と聞流して、募るは非道の振舞、狼や虎が人間の形をかりて來れるものか、兄を兄とも思はず、家臣を家臣とも思はず、これまで罪なき人を殺したることそも幾何。このまゝ生かし置かば如何なる事をしてかすかもわからず。訓戒すべき術既に盡きたり。この上は一思ひに命を絶ちてやること却て弟の爲なり、また天下の爲なり。頼むぞ孫兵衛、わが心の切なさを推量してこの大任を果してくれよ。」

丹後守の心中、一應は尤なり。されど孫兵衛は思慮ある男、「御言葉一々御尤にまします。さりながら御弟を殺し給ひては、弟君の亂行にも劣らぬ亂行になり申すべし。殺し給はずとも、懲らしめ給ふ道なきに非ず。今一應御熟考あらせたまへ。」

一旦言ひ出してはあとへはひかぬ氣象の丹後守、孫兵衛の諫言を聞いて、かつと怒れり。

「よし、汝に頼むまじ。何やかやと小ざかしう理窟陳べたて、我が命を拒むは、よくよく卑怯なる男、そのやうなる男に、弟を斬ることは出來まじ。いざ出て行け。他の卑怯ならぬ者に頼むぞ。」

この言を聞きたる孫兵衛の心の中や如何なりけん。十六年の歳月は短けれど、膽を練り武を磨きて、あつばれ一人前の武士たるに恥ぢぬ男一疋。人を殺す能はざる卑怯者とさげすまれては、今日より直ちに武士の一分が立たぬなり。君命に従はんか、君をして弟を殺すの罪名を負はしめん。君命に従はざらんか、男を捨て、刀を捨て、父祖の家名を辱めざるを得ず。世にも苦しき命令を受けたるものかな。孫兵衛は煩悶すること一方ならざりしが、忽ち決心せり。

「此の上は致方なし。謹んで仰を奉じまつらん。たと臣が卑怯ならぬを證すべければ、檢視する人一人添へてたまはれ。」

羅刹
Raksasa
梵語で野蠻人の義
鬼轉じて食人

さらばとばかり、檢視役と共に出て行く孫兵衛、今ひと目と君の館を顧みて、ほろりとこぼす一滴の涙は、知らず、何をか語る。

無法極る式部の君、兄の使と聞きて、はや癩にさはれり。眼を瞋らし、面に朱をそゝげるさま、悪鬼羅刹もかくやと思はる。その手、刀の柵を握りて一喝す。

「近寄らば斬り殺すぞ。」

されど孫兵衛はびくともせざるなり。

「身は殺さるとも、君の仰は傳へざるを得ず。遠くでははつきり致さず。許させたまへ。」

刀を抜いて座に置き、ゐざりゆきつゝ、直ちに式部の膝の前

まで進み、臆する色なく、徐に式部の罪を數へぬ。數へ畢つて曰く、

「主君の命なり、御觀念あれ。」

をどりあがりて式部を組伏せ、ひともがきももがかしめず、に押へつけたるは神のわざか、鬼のわざか。檢使驚歎し、式部あつとばかりにて一言もなし。

孫兵衛脇差を抜いて式部の胸に向け、檢使を顧みて曰く、

「わが卑怯ならざるは、既に見届け給へるなるべし。早速この旨を主君に傳へられよ。」

檢使は去りぬ。

孫兵衛脇差を投げすて、式部を抱き起し、一間ばかり後じさ

りして平伏す。

「御赦しあれ、君命やみ難く、無禮つかまつりぬ。今は既に

君命を果しつれば、御身の爲に計らひ申さん。御身今や

此の土地に留り給ふべからず。しばし他國に落ちのび

て命を全うし給へ。臣萬死を誓つて擁護しまつらん。」

さすがに暴悪なる式部も孫兵衛の膽勇と眞心とには感歎

せざるを得ず。おとなしく孫兵衛と共に落ちゆけり。

かくて孫兵衛は君命を全うし、君に罪名を負はしめず、又己

の武をも辱めざりけるなり。

後數年、式部旅路の空に病死しければ、孫兵衛呼び還されて

重く用ひられけりとぞ。 （男の中の男）

國木田獨歩

名は哲夫

文學者

千葉縣銚子に生

れ山口縣に長じ

た

明治四十一年歿

年三十八

一八 武藏野

國木田獨歩

昔の武藏野は目のとゞくかぎり萱原であつたやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。林の木は重に檜の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌え出る。其の變化が秩父山脈以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠陰に、紅葉に、様々の光景を呈する。其の妙は一寸西國地方又は東北の者には分りかねるのである。檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が

私語く、風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木葉が高く大空に舞つて、小鳥の群の如く遠く飛去る。木の葉が落ち盡せば、數十里四方に互る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月廿六日の日記に、林の奥に坐して四顧し、傾聽し、諦視し、默想すと書いた。此の傾聽といふことが、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つて居るだらう。秋ならば林の中より起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭林の奥にすだく蟲の音。

空車荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴ちらす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかりゆく。獨り寂しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに



武藏野

起る銃の音。

殊に時雨の音に至つては、是程閑寂なものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題にまでなつてゐるが、廣い野末から野末へと、林を越え、杜を越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り過ぎる時雨の音の、如何にも幽かたで、又鷹揚な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。

自分は嘗て北海道の深林で時雨に逢つたことがある。これは又人跡絶無の大深林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り武藏野の時雨の更に人懐かしく私語くが如き趣はない。(武藏野)

淺草紙

すきがへし紙の一種
反古紙ぼろなどを水にひたし搗き碎いて粘土をまぜてすきあげ

吉村冬彦

本名は寺田寅彦
物理學者
理學博士
東京帝國大學教授
明治十一年高知縣生

一九 淺草紙

吉村冬彦

十二月初のある日、珍しくよく晴れて、そして風のちつともない午前、私は病床から這出して、縁側で日向ぼつこをしてゐた。都會ではめつたに見られぬ強烈な日光のぢかに顔に照りつけるのが、少し痛い程であつた。それに、乾してある蒲團からは、ぼか〜と暖い陽炎が立つてゐるやうであつた。濕つた庭の土からは、かすかに白い霧が立つて、それが僅かな氣紛れな風の戦ソコぎにあふられて、小さな渦を巻いたりしてゐた。子供等は皆學校へ行つてゐるし、他の家族も何處で何をしてゐるのか、少しの音もしなかつた。實

に靜かな穩かな朝であつた。

私は無我無心でぼんやりしてゐた。たゞ身體中の毛穴から暖い日光を吸込んで、それが此のしなびた肉體の中に滲込んで行くやうな心持をかすかに自覺してゐるだけであつた。

ふと氣がついて見ると、私のすぐ眼の前の縁側の端に一枚の淺草紙が落ちてゐる。それはまだ新しい、ちつとも汚れてゐないのであつた。私は殆ど無意識にそれを取上げて見てゐる内に、其の紙の上に現れてゐる色々の斑點が眼につき出した。

紙の色は鈍い鼠色で、丁度子供等の手工に使ふ粘土のやう

な色をしてゐる。片側は滑かであるが、裏側は随分ざらざらして、荒縫のやうな縞目が目立つて見える。併し日光に透して見てみると、これとは又獨立な、もつと細かく規則正しい簾スのやうな縞目が見える。此の縞は多分紙を漉く時に纖維を沈着させるために用ひた簾の痕跡であらうが、裏側の荒い縞は何だか分らなかつた。

指頭大の穴が三つばかりあいて、其の周圍から喰み出した纖維が、其の穴を塞がうとして手を延ばしてゐた。

そんな事はどうでもよいが、私の眼についたのは、此の灰色の四十平方寸ばかりの面積の上に、不規則に散在してゐるさまざまの斑點イであつた。

マッチ
Paper
ペーパー

先づ一番に氣の附いたのは赤や青や紫などの美しい色彩を帯びた斑點である。大きいのでせいと二三平方、小さいのは蟲眼鏡でも見なければならぬやうな色紙の片が漉込まれてゐるのである。それが唯一様な色紙ではなくて、よく見ると、其の上には色々の規則正しい模様や縞や點線が現れてゐる。よく見てみると、其の中の或物は狀袋シヤクのたばを束ねてある帶紙らしかつた。又或物は巻煙草の「朝日」の包紙の一片らしかつた。マッチのペーパーや、廣告のちらし紙や、女の子のおもちやにするおすべ紙や、あらゆるさういふ色刷のどれかを想ひ出させるやうな片が見出されて來た。微細な斷片が想像の力で補充され

て、頭の中には色々な大きな色彩の模様が現れて来た。普通の白地に黒インキで印刷した文字もあつた。大概やつと一字、せいとで二字位しか讀めない。それを拾つて讀んで見ると、例へば「一同・圓などはいゝが、^{タウ}邊などといふ妙な文字も現れてゐる。それが何かの意味の深い謎でゝもあるやうな氣がするのであつた。「蛤カマかな」といふ新聞の俳句欄の一片らしいのが見つかつた時は、少しをかしくなつて来て、つい獨りで笑つた。

紙片の外に、まださまざまの物の破片がくつついて居た。木綿糸の結び玉や、毛髪や、動物の毛らしいものや、ボール紙のかけらや、鉛筆の削り屑、マッチ箱の破片、こんなものは容

Board
ボード
板
black board

易に認められるが、中にはどうしても來歴の分らない不思議な物件の斷片があつた。それから或植物の枯れた外皮と思はれるのがあつて、其の植物が何だといふことがどうしても思ひ出せなかつたりした。

此等の小片は動植物界のものばかりでなく、礦物界からのものもあつた。斜に日光にすかして見ると、雲母の小片が銀色の鱗のやうにきら／＼光つてゐた。

段々見て行く中に、此の澤山な物のかけらの歴史が可なりに面白いものゝやうに思はれて来た。何の関係もない色の工場で製造された種々の物品が、さまざまの道を通つて、或家の紙屑籠で一度集合した後に、又他の家から来た紙

エマーソン

Emerson (1803—1882)
米國の思想家
詩人

シェクスピア

Shakespeare (1564—1616)
英國の大戯曲家
詩人

屑と混合して、製紙場の槽から流れ出すまでの徑路に、どれ程の複雑な世相が纏綿してゐたか。かう一枚の淺草紙になつてしまつた今では、再びそれをたどつて見やうはなかつた。私は唯漠然と、日常の世界に張渡された因果の網目の、限もない複雑さを思ひ浮べるに過ぎなかつた。あらゆる方面から來る材料が一つの釜で混ぜられ、こなされて、それから又新しい一つのもが生れるといふ過程は、人間の精神界の製作品にもそれに類似した過程のある事を聯想させない譯にはゆかなかつた。そのやうな聯想から、私はふとエマーソンが「シェクスピア論」の冒頭に書いてある言葉を思ひ出した。「價值のある獨

Originality

オリヂナリチー

モンテーニユ

Montaigne (1533—1592)
佛國の思想家

創は他人に似ないといふ事ではない。「最も大いなる天才は最も負債の多い人である。」こんな意味の言葉が思ひ出された。それから又或盲目の學者が、モンテーニユの研究をする爲に採つた綿密な調査の方法を思ひ出した。モンテーニユの論文を悉く點字に寫し取つた中から、あらゆる思想や、警句や、特徴や、挿話を書抜き、分類し、整理した後に、更に此の著者が讀んだであらうと思はれるあらゆる書物を讀んだり、讀んで貫つたりして、其の中に見出される典據や類型を拾ひ出すといふのである。此の盲人の根氣と熱心とに感心すると同時に、其の仕事が何處となく、私が今紙面の斑點を

平滑

搜しては其の出所を詮索した事に似通つてゐるやうな氣もした。どんな偉大な作家の傑作でも——寧ろさういふ人の作ほど豊富な文獻上の材料が混入してゐるのは當然な事であつた。それを穿鑿するのは興味もあり有益な事でもあるが、それは作と作家との價値を否定する材料にはならなかつた。要は資料がどれだけよくこなされてゐるか、不淨なものがどれだけ洗はれてゐるかにあつた。魔術師でないかぎり、何も無い眞空から假令一片の淺草紙でも創造する事は出來さうに思はれない。しかし紙の材料をもつと精選し、もつとよくこなし、もう一層よく洗濯して、純白な平滑な光澤があつて堅實な紙に仕上げる事は出

來る筈である。マッチのペーパーや活字の斷片が其のまま眼につく内は、まだ改良の餘地がある。(冬彦集)

二〇 讀書

坪内逍遙

坪内逍遙

名は雄藏

文學者

文學博士

早稻田大學名譽

教授

安政六年(一五九)

美濃國太田村生

キケロ

Cicero (前100—43) ローマの雄辯家、政治家、文學者

常に良き著述に親しむ者は、只獨り居れども寂しきことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり。失意にも慰み、不平憂悶も之を忘る。「書は少年の滋味にして老年の娛樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰安とを與ふ。家に在れば心を樂しましめ、外に出でたる時も邪魔とはならず。夜の伴、旅の伴、僻地の伴、と羅馬の名士キケロの言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは人の

讀書より受くる最大の利益にはあらず。諺に「百聞一見に如かず」といへるは何事も其の身親しく経験するに如かずといふ意味なれども、人の壽命に限あれば、七十・八十まで生きたりとも、目に視、耳に聴くことは幾何もあるべからず。我が日本國內の山水・風俗だけにても一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大なるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一生の経験の狭く浅く、小さく、且少なるべきは言ふにも及ばぬ事なり。されはこそ、今も昔も、苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人々は、一方には見聞を勵み、経験を努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て之に親しまんことを願

ランビキ

Lambique
蒸餾器



透 道 内 坪

て傳へたるものなり。或は
 顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも可
 なり。固より人工に成りた
 るものなれども、人をして肉
 眼にて看得ざる微なるもの

をも、遠く且大なるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして良書の助を藉ることなく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も、人間界の事も、僅かに一斑を窺ふ

に過ぎざるべく、其の一斑だにも正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、兼ねて智を研く砥石なり。しかしながら讀書の用は尙之に盡きたるに非ず。

筆蹟
養志者忘形、
養形者忘利、
致道者忘心。
大正二年初秋
於熱海
逍遙遊人

坪内逍遙筆蹟

伊太利の詩人ペトラルカは曰く、予に良友あり。彼等は皆名士・大家にして、何れも偉業を成したる者なり。予若し其の助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る」と。是良書が常に其の讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、獎勵する力あ

Petrarca
(1304—1374)

ペトラルカ

逍遙遊人

チャンニング

Channing
(1780—1812)

米國の宣教師
著述家

ミルトン

Milton
(1608—1674)

るをいへるなり。北米の名士チャンニングも亦曰く、吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、おもに書籍の媒介に因る。而してかゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑、吾人に對ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人のために吐露す」と。英國の詩人ミルトンもまた曰く、「良書は保全踏襲して後世に傳へられたる俊傑の貴重なる生血なり」と。

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次に或は他の識見の大なるに驚き、或は品性の高きに感じ、嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なることかくの如き

伊達政宗
輝宗の子
仙臺藩の祖
寛永十三年(三三〇)
卒

湯淺常山

名は元禎
岡山藩士
天明元年(四四二)
歿

會津征伐

慶長五年(三三〇)
五月徳川家康が
會津の上杉景勝
を征伐した戦

白河

福島縣西白河郡
白河町

白石

宮城縣刈田郡白
石町

ものもあるか」と歎ずるなり。若し假初にも其の偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、之に倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書の用極れるにちかしといふべし。(中學修身訓)

二 伊達政宗

湯淺常山

會津征伐の御時、伊達左京大夫政宗は急ぎ本國に歸り、搦手より攻入るべき由仰を承り、大阪を打立つて夜を日に繼ぎて馳下る。白河より白石まで皆敵の中なれば、道塞がりぬ。常陸國を廻りて、磐城・相馬にさしかゝつて國に歸らんとするに、相馬また累代の仇なり。然るに政宗僅かに五十騎ば

磐城

福島縣磐城郡平

相馬

福島縣相馬郡中
村町

義胤

盛胤の子

相馬領主

寛永十一年(三三
四)卒

年八十八

かり引具して常州を經磐城と相馬との境に到り、まづ相馬が許に使を立て、此の度徳川殿上杉を征伐し給ふにより、政宗搦手より向ふべき由の仰を承りぬ。路既に塞がり候ひし程に、やうく此の城に馳着きぬ。餘りに早めて道を打ちし故疲れ候。願はくは城下に旅館を賜はらばや。馬の足休めて明日國に歸り入らんと存ず。と言はせたり。

相馬長門守義胤之を聞き、あつばれ運の盡きたる事ぞかし。さらぬだに、伊達は相馬が年頃の敵なり。ましてや味方討たん一方の大將承りたりと言ふものを、いでく今宵一夜討して、案内知らぬ奴原を一人も残らず討取つて、年頃の仇に報い、又今度の賞にも預らばや。とて、やがて民家をしつら

窮鳥懐に入る
窮鳥入レ懐仁人
所レ憫。
(頼氏家訓)

駒ヶ嶺
福島縣相馬郡駒
ヶ嶺村
中村町の北二里
半
仙臺市の南十八
里
もと仙臺領

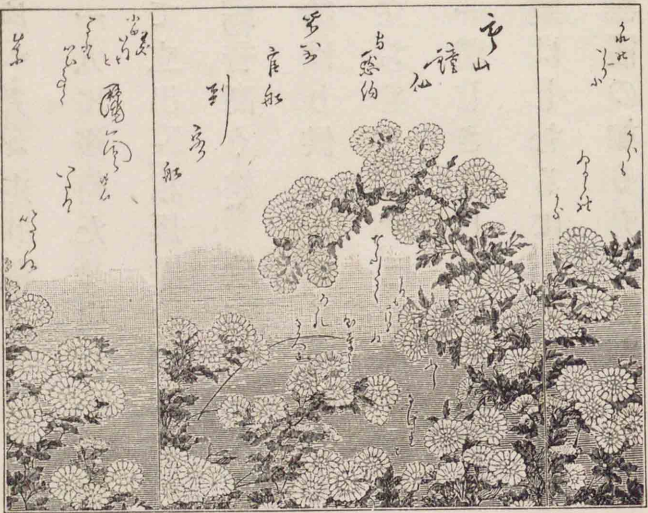
ひて迎へ入れ、人々集めて夜討の評定したりけり。
爰に水谷三郎兵衛といふ者遙かの末座に候ひけるが、進み
出で、末座の異見恐入つて候へども、既に會議の座に列りて



伊達政宗(松島瑞巖寺藏)

候へば、所存を残すべきに
あらず。抑、窮鳥懐に入る
時は獵者も之を殺さずと
こそ申し候へ。政宗程の
大將、年頃の怨を棄て、君
を頼みて來りしを、たばかりて闇々と討たれんこと、勇者の
本意にあらず。永き弓箭の瑕瑾ならずや。又彼が國境駒
ヶ嶺に到らん、に、行程僅かに二里、けふ日未だ未の時にさが

らず。政宗が國に入らんとだに思はゞ、日夕ならざるに到



伊達政宗筆蹟

るべし。それに僅かの勢
にて留ること、深き慮あら
ざらんや。只此の度はよ
きに警固して國に還し、重
ねて戰に臨まん日、勝敗を
天運に任せらるべきにや。
と申しければ、一座の人々
此の議に同じ、兵糧、秣、藁、鹽
魚に至るまで積置き、篝火
を焚きて夜廻す。義胤が士ども、政宗餘りに静まり返りた

上杉
上杉景勝

る體こそ心憎けれ。いざ試みんとて、夜更けて後馬二匹取
放ち、人々走り散りて、以ての外に騒ぎのゝしる。政宗小童
一人に燭持たせ、白き小袖を上に打掛け、左の手に刀を提げ
て立出で、「相馬殿の御人や候」と言ふ。「是に候」とて行向へば、
「物音高く候。政宗が下人ばら狼藉候はんには、よく靜めて
給はり候へ」とて、又内にぞ入りたりける。夜明けけれども
立ちもやらず、巳の時ばかりになりて、義胤のもとに使して
一禮し、さてしづめて馬を打つて行く。竊かに人をつけて
窺はしむるに、かの國の境駒ヶ嶺のあなたに伊達家の軍兵
雲霞の如く充ち満ちて出迎へぬ。
かくて關ヶ原の事終りて、相馬既に上杉に心合せたれば、亡

石田
石田三成

柳生宗矩

徳川初期の劍法
家

但馬守

三代將軍家光の
輔導役

正保三年(一六五〇)

歿

年七十六

新井白石

名は君美

政治家

學者

享保十年(一七二五)

歿

年六十九

寛永十四年

明正天皇の御代

將軍家光の時

(一三九七)

散樂

能樂

ぶべきに極る。政宗訴へ申されしは、相馬は年頃政宗が敵
なり。石田上杉に與したるが一定ならんには、政宗彼が爲
に討たれしなるべし。然るに君の仰承りて馳下るよしを
聞いて、深き怨を忘れ、新恩を施しき。彼が逆謀にあらざる
の證に候はずや。又累代の弓箭の家永く斷たれんこと不
便の至なり。と度々嘆き申されしかば、後には本領を相馬に
賜ひけりとぞ聞えし。(常山紀談)

二二 柳生宗矩

新井白石

寛永十四年十一月十日、有馬玄蕃頭豊氏の家に散樂ありて
人々多く集り見る。宗矩もこゝに行向つて、酒宴半ばなる

松倉殿

島原城主松倉重

政

有馬の故城

島原半島の南端

口之津の原城

有馬氏の舊城

板倉内膳正

名は重昌

徳川家康以來三

代の將軍に仕へ

た

寛永十五年(三元

〇戦死

年五十一



徳川家光 (東京帝國大學藏版)

に、日已に未の終りばかりになつて、宗矩が郎等來り、主を呼出して、「君は未だ知召されずや、肥前國高來の郡の土民百姓等、悉く耶蘇の門徒にて、守護松倉殿に叛き、有馬の古城に立籠るよし、筑紫より早馬來つて告げ申すに依りて、板倉内膳正殿追討の御使を蒙り給ひ、はや御發向候ひぬ。」と申す。宗矩聞きて、さらぬ體にて座に歸りて、亭主豊氏に向ひ、「急ぎて宿所に歸るべき事出來て候。脚早き馬貸し給へ。」といへば、鞍置きて引立つ。急ぎ打乗り

品川

今の東京府品川

町

舊東海道第一次

の宿

川崎

今の神奈川県川

崎市

舊東海道五十三

次の一

品川宿の次

御前

徳川家光の

て、西を指して馳行き、品川に至りて、「板倉殿は過ぎしや」と問ふ。「今は遙かに延びさせ給ふらん」と答ふ。鞍鐙を合せて馳行き、川崎に至りて問ひたまへば、「板倉殿は今二三里も隔らせ給ふべし」と答ふ。日は已に暮れなんとす。せん方なくて引返し、城に登る。日はとく暮れてけり。近く侍ふ人を以て、「宗矩申すべき事あつて伺候しぬ」と申しければ、やがて御前に召されて、「何事にか參りし」と尋ねさせ給ふ。宗矩畏つて、「今日さる人の許に酒盛し候に、筑紫にて逆徒起り、内膳正追討の御使を承り馳向ふと承りし程に、仰の旨と稱し、止めばやと存じ、馬を馳せて追懸くれど、追附かず、日暮れ候故に、此の由を申さんと

て参りて候と申す。「何に由りてか、重昌を止めんと致しけるぞ」と仰せ下されしかば、君は只管の土民百姓等の叛逆せしと思召されるればこそ、追討の御使かく軽く候ひつれ。すべて宗門に就いて起る軍は、大事の者に候。此の定にては、重昌必ず討死仕るべし。如何にも謀りて止めばやと存じ候ひぬ」と申す。以ての外に御氣色損じ、御座を立たせ給ふ宗矩次の間に伺候して、夜更くれども罷り出でず。此の由を聞き召して、重ねて御座に出でさせたまひ、宗矩を召す。「重昌死すべしとは何故かくは申すぞ」とありし時、宗矩「さん候。それ兵の道は勇を以て旨とつかまつる。勇士は必ず死を懼れず。三軍の士をして悉く死を懼れざらし

伊勢の長島
元龜元年(三三〇)十月尾張國小木江の城將織田信興が長島一揆に殺されたので翌二年信長は長島を攻め、天正二年(三三四)九月に漸くこれを陥れた大阪の城
天正四年(三三六)四月信長は大阪の石山城なる本願寺の一向宗徒を伐つた
三河國の一揆
永祿六年(三三三)三河國碧海郡に起つた一向宗徒の一揆

めんことは、古の能く兵を用ふる者も及び難しと承りぬ。凡そ下愚の人、法を深く信じ候者は、我が法を固く守りて、死するを以て身の悦とす。是れ百千の衆、悉く期せずして、必死の勇士と變ずるの術にて候。遠く例を引くまでも候はず、織田殿兵威を以て伊勢の長島を攻めて、多くの大將を討たせ、諸卒を失ひ、年を重ねてやうくに城を落さる。攝津國大阪の城をば、終に落し得ず、天子の勅令をかりて中直りして、軍は終りて候。三河國の一揆は、近く御家の事に候。去りし大阪の軍に、重昌いまだ年若く候時だにも、數十萬騎の中に只一人擇み出されて、大事の使承つたる者なれば、是等の兇徒を滅さんに、何事かあるべき、且は當時御使承る上

は、誰か其の下知に背くべきなど思召されなば、事の違ひ候はんか。重昌が今少し位も高く、祿も厚く、又年頃重き職をも掌つて、常に世にも人にも畏れ敬はれて候はんには、誠に好き御使にこそ候べけれ。今の重昌の身にて、西國の大名等の軍勢を催して城を攻めんに、一度は御使を承りたるに畏れて其の下知に隨はんが、思ふにも似ず攻めあぐみて候はんには、重昌如何に思ふとも、心に任すべからず。其の時に至りなば、御一門の人々か、さらば宿老の中を擇みて、重ねて御使に遣はさるゝよりの外あるべからず。さらんに因つては、重昌何の面目あつてか、生きて再び關東に還りて見参には入り候べき。あつたらしき御家人を失ひ候はん

こと、誠に惜しく候へども、猶それよりも、御使を承りたる者を、土民百姓のために討たせて候といふことは、永き天下の御恥辱にこそ存ずれ。あはれ宗矩御許を蒙らば、追附いて、能くこしらへて、召具して参り候べし」と、憚るところなく申しければ、御後悔の色見えさせ給ひしかど、更にそれも叶ひ難くや思召されけん、夜いたく更けたり、罷り歸りて休み候へ」と仰せければ、御暇賜はりて、御前を退出す。後に思ひ合するに、宗矩が申せし所、掌を指すよりも明らかにぞ候ひける。(藩翰譜)

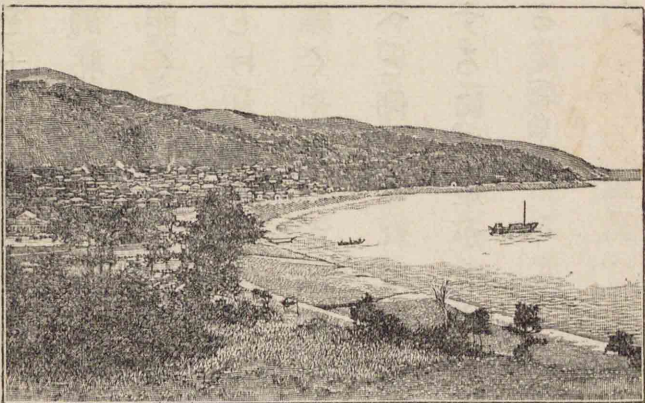
二三 わが袖の記

高山樗牛

高山樗牛
名は林次郎
評論家
文學博士
山形縣鶴岡市生
明治三十五年歿
年三十四

熱海
伊豆の東北隅
日金山の東麓
温泉場として名
高い

熱海の冬



のかをれるもをかしく、蘆の屋に心細く立ちのぼる煙もの

熱海

熱海のふた月はまことに樂しき
あはれ深き冬の暮なりき。よそ
ならば吹雪にとぢられて、日影も
薄き冬の眞中も、名にし負ふ熱海
なれば、こちふく風も寒からず。
むつきはじめの梅が香は、早くも
春を告げわたりて、野邊のやけあ
との萌えそむるは、人の心もとき
めくころか。苦屋どもに岩海苔

大島
伊豆列島の一

沖の小島
箱根路をわが越
えくれば伊豆の
海や沖の小島に
波のよる見ゆ
(源實朝)

初島
熱海の東南海上
三里
魚見が崎
熱海町の南端の
岬

三保
清見が關の南二
里
中に田子の浦を
抱く

どかなり。

海原遠く見渡せば、相模安房の山々雲か霞のすがたおもし
ろく、大島がねに立つ煙の風にたなびけるは、水や空とも分
ちかねたり。「沖の小島」と誰がよみたりし。初島わたり漕
ぐふなうたの寄る浪毎に聞ゆるもゆかしく、魚見が崎のこ
なたより渚をつたうて、砂白く松青きほとり、濱千鳥の群れ
飛ぶさまもいとをかし。後には日金十國の山々を負ひ、前
には天空海濶の間に一灣の春を擁する豆南の風光は、筆に
はなかしく、に及びがたし。

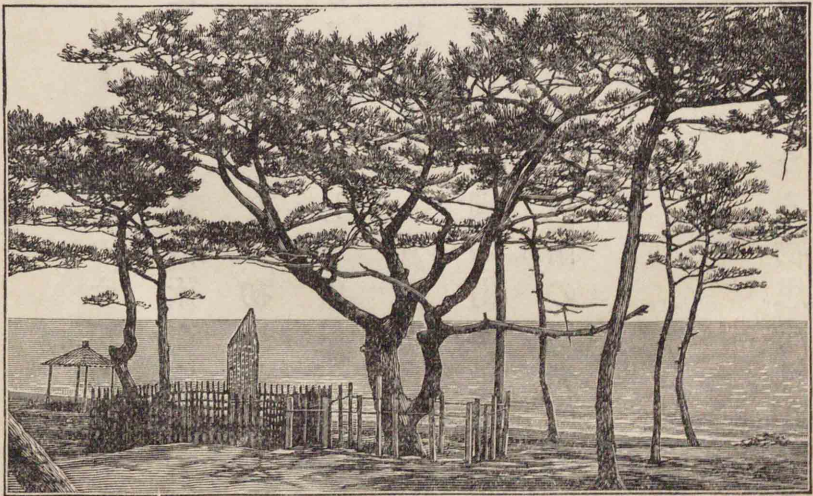
三保の春

松風遠く吹合はせて、波の音もかすかなる、物思まさる夕な

清見が關
静岡縣庵原郡に
ある名所
東海道線興津驛
の附近

江尻
静岡縣清水市の
内
清水
同上
龍華寺
同縣安倍郡不二
見村にある法華
宗の寺

りき。われひとり清見が關
の宿を立出でて三保の松原
に遊ぶ。入日の影は雲にの
み残りて、月未だ上らず。田
子の浦曲の夕なぎに、千鳥の
聲もいと稀なり。江尻清水
をはや過ぎて龍華寺の輪塔
を右手に見る。袂に寒き山
嵐に入相の鐘を吹送りて、初
春のあはれ一入深し。三保
原に迎り着ける頃は、月やうや



三保松原羽衣の松

く上り、清見潟の水煙は闇路遙かに立ちこめて、富士の高嶺
は雪の色白し。見わたせば一帯の松林、木ぶかく生ひしげ
れるかな。木立の篩へる月のあかりに、残んの雪の色、
て、杜の下道杳かなる、霞に落つる影もなし。波の音やうや
く近くして、われは羽衣の松に添うて立ちぬ。
羽衣の松はわが年久しく思ひこがれしものなりき。よし
さらば、今宵は月と共に立ちあかさなかな。
松は早く枯れて、幹の朽ちたるが残り。そのもとにゆか
りを誌せるとおぼしき石ぶみあれど、月の光おぼろにして
今は見えわかず。あはれ、波の音と松風とのみぞ、今も昔に
かはらざりける。(文は人なり)

島崎藤村
名は春樹
詩人
小説家
明治五年長野縣
木曾生

二四 棕櫚と躑躅

島崎藤村

棕櫚 たうとう春の雪が來た。

躑躅 今朝、私が眼をさましたら、私は身動きすることも出
來なかつた。何も見ることが出來ないくらゐだつた。
私はすつかり雪の中に埋められてゐた。

棕櫚 お前はそこにじつと蹲しゃがんでゐたのか。昨夜、この
雪が來た時の静かさと言つたらなかつた。音一つしな
かつた。あの静かさの中で、私もお前も深くく埋めら
れて行つた。見る間にお前は眞白になつた。私の葉の
上にも重いやつが積りに積つてゐたが、そのうちに眠く

なるやうな眩暈が襲つて來た。

躑躅 深い雪が來たものだ。

秩父の山
武蔵の西方信濃
甲斐の境に連な
る山脈
東京の西方武蔵
野の果に見える

棕櫚 お前もさう思ふのか。山へはもう初雪が來たと聞
いた時に、私たちは今日あることを豫期してゐた。あの
秩父の山の頂がそろく白くなるといふ頃から私たち
が待ちうけてゐたのもこの雪だ。でも、こんな雪がやつ
て來て見ると、全く思ひがけないやうな氣がする。
今更のやうに、私は自然の權威に打たれた。御覽、あの石
垣の側に背ばかりひよろ長く延びた榎の枝が折れた。
私は今朝眼をさましてあれを見た時に、他事ひとごととも思へな
かつた。細い山茶花の幹などは弓狀に曲つてゐた。八

手も葉をひろげて大きな顔をしてゐたが、もうすこして私はあの木が根から倒れるかと思つた。どうして、こんな雪が來て御覽威勢のいゝ竹の藪でさへ草のやうに寝ることを想像して見るがいゝ。

棕櫚 雪が來てからもう三日目になる。一昨日の晩はまた寒い雪まじりの雨が來た。さう言へば、お前も昨夜の恐しい音を聞いたらう。あの屋根から雪の落ちる音を聞いたらう。私はこの庭の隅で、一晚中あの恐しい音を聞いてゐた。

躑躅 あれは崖でも崩れるかと思ふやうな音だつた。雪

の積つたのが屋根から崩れ落ちる度に、恐しい地響きがした。一つの音が絶えたかと思ふと、また他の音が續いた。どうかすると、私は遠い山の上の方の崩雪やぶだれでも聞いて居るやうな氣がした。

棕櫚 もしこんな雪が一晩に四尺も五尺も降り積るとしたら、どんなものだらう。その積つた上にまた積つたやつが一冬の間も解けずにあるとしたら、どんなものだらう。しかしこの雪は、北國地方へ來る雪でもなく、信濃あたりの山の上に來る雪でもなく、やはり、どうしても春先の武藏野へ來る雪だ。

躑躅 屋根から雪の落ちる音を聞いてゐると、餘分にそん

な氣がした。深夜の空氣の中であの恐しい音を聞いた時の心持は、何とも言へなかつた。

棕櫚 お前はあの音の中に何を聞きつけたか。

躑躅 やがてもう私たちのところへも春がやつて来る。さう思ひながら、私は小さくなつて聞いてゐた。

棕櫚 さうだ。雪が来て、却て私たちは自分等の内部にあるものを引出されたやうな氣がする——私たちの發芽力をも、私たちの反撥力をも。御覽、私はこの團扇のやうな形した大きな葉の上の雪をあらかた振り落した。躑躅 御蔭でお前の葉から落ちて来る雪は、この私がみんな引受けてしまつた。どうして、お前はそんなに脊が高

いのだもの。

棕櫚 それは私も思はないではなかつた。私はお前に背負はせるつもりもなく自分の雪まで背負はせてしまつた。しかしどうすることも出来なかつた。たゞ私は重いものを振り落さうとする勢に驅られた。お前の背負つて居る雪は、今、そんなに重荷なのか。お前にはその雪を撥ねのける力もないのか。

躑躅 私はお前と違つてこの通り脊の低いことを想つて見ておくれ。私の側にある石でも、僅かに頭だけ持ちあげて居る蘭でも、まだみんな雪の中だ。この周圍にあるものを置いて、今が今、私には起き上れさうもない。しか

し時が來れば、私も重い雪を撥ねのけずには置かない。
この私の細い小さな枝に案外の力の出ることは、お前も
知つて居る通りだ。

棕櫚 雪が來て、却て力を増したものは、私たちばかりでは
ない。私はこの庭の隅の位置から、隣家の高い檜の枝を
望むことも出来る。雪に濡れた檜の葉。不思議な自然
は私たちの氣のつかないところに何程の輝きを置くこ
とか、あの深い光澤のある緑葉からは最早春の焰が流れ
て來て居るやうに見える。

棕櫚 溫暖い雨がやつて來るやうになつた。來るか來る

かと思つて、この雨を待ちわびた心持はなかつた。過ぐ
る四ヶ月ばかりの間私たちは唯その事ばかり思ひ暮し
たやうなものだ。

躑躅 もう芍薬の芽が見られる。

棕櫚 あそこに頭を持ちあげたのは、あれは翁草だらうか。

躑躅 あれは鬱金香だ。

棕櫚 ほんとに草花の芽一つでも、同じ色、同じ形でこの土
から出て來るものはない。あるものは控へ目に、あるも
のは頭を垂れ、あるものは背を曲げて嬰兒の様に見える。
躑躅 つましましやかに地を割つて出て來た雛罌粟も、今に
どんな花を着けることか。

棕櫚 八重咲の乙女椿の蕾がふくらんで來たのも、眼につくやうになつた。今にこの庭が花のさかりになつて、私たちまで咲出すやうな時が來たら、どんなだらう。

躑躅 それももうそんなに遠いことでもあるまい。

棕櫚 あの乙女椿の蕾を御覽、あれは去年の十月頃から支度して居る蕾だ。眞先に濃い緑葉の中から眸を開かうとして、せつせと支度を急いでゐた花だ。あの乙女椿が花瓣を落す頃にならなければ私は出掛けられまい。もしさういふ時が來たら、この私がどんな大きな蕾を着けてお前を驚かすことだらう。その大きな蕾の破れた時は、私は、高い梢の上の方から無数の小形な花を落してよ

こすだらう。そしてその無数の黄色い花でもつてお前を埋めてしまふだらう。私の咲いて見せるやうな花は、假令その姿がどんな不思議なものでも、私を見て笑ふものはあるまい。恐らく、私の花のさかりは人の叡智を超えたものだらう。全く清淨で、無垢なものだらう。どんな人でも花の新鮮を譯し出し得るほど純粹な心を持たないと、言つて見せた、すぐれた藝術家もある。飯倉だより

二五 樹の根

和辻哲郎

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐながら、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは餘り考へて見たことがなかつ

和辻哲郎
哲學者
京都帝國大學助
教授
明治二十二年兵
庫縣生

た。美しい赤褐色の幹やわりに色の浅い清らかな緑の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落ちついた潤ひのある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を増して来る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽かな氣分が樹の色や光の中に漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節かはいゝ小鳥の群が活きくゝした聲で囀りかはして、緑の葉の間を樂しさうに往き來する。——それが私の親しい松の樹であつた。

しかるに、或時私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩し

てゐる處にたゞずんで、砂の中に喰込んだ複雑な根を見ることが出来た。地上と地下との姿が何とひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、——それに比べて、地下の根は、戦ひもがき、苦しみ、精一杯の努力を盡したやうに、枝から枝と分れて、亂れた女の髪の様、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこの様な根が地下にあることを知つてはゐた。併しそれを目の前にまざくゝと見た時には、思はず驚異の情に打たれぬ譯には行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下の苦みが不斷に彼らにあることを、

一度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼の苦みの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼の苦しうな顔を見たのは、湿りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。併しその叫び聲や萎れた顔もその時さへ過ぎれば、すぐにもとの快活に歸つて、苦みの痕をめつたにあとへ残さない。而も彼らは、我々の眼に秘められた地下の營みを、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこの様な苦勞の上にもみ可能なのであつた。この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感じずるやうになつた。彼らは我々と共に生きて

ゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜の木から、何とも言へぬ莊嚴な心持を押しつけられた。

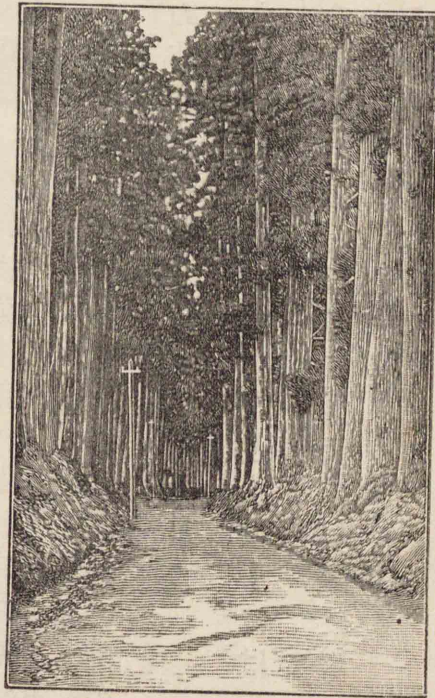
なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。この地をえらんだ弘法大師の見識にもつくづく敬服するやうな氣持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて、平野から切離された、急峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たか分らない老樹

高野山
和歌山縣伊都郡にある名山
弘仁七年（四七六）空海は此の山を相して金剛峰寺を建てた
寺域は七里四方に及ぶ
不動坂
京口即ち京都方面の登山口から登り一里の坂
その上に不動堂がある
弘法大師
空海
眞言宗の開祖
承和二年（四九五）
寂
年六十二

金剛不壞
金剛は金屬中の最も剛堅なるもの
佛の身を金剛不壞の身などといふ

たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどな、どつしりとした、迷ひのない、壯大な力強さを以て、天を目指して直立してゐる。さ



高野山の杉

うして樹々の間に漂うてゐる生の氣は、ひたひたと人間の肌にも迫つて來る。

私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地下の烈しい營みは既に地上一尺のところにも明かに現れてゐる。土の層の深

くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へるために、太い強靱な根は力の限四方へひろがつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は、一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雑にからみ合つてゐる有様は、想像するだけで我々に驚異の情を起させる。たしかにはげしい生の力の營みによつて、残る所なく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見る事は出来なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出來た。隠れた努力の威壓が、神祕の影をさへ帯びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして地下の營みに没頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遅くない。

成長を欲するものはまづ根を確かにおろさなくてはならぬ。

上に伸びることをのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下に喰入る事に没頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいゝ頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしなない人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる値打がないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の根が一つの地殻に突當つて、それを突破する努力に悩んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。——私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生れる筈はない。

古來の偉人には雄大な根の營みがあつた。その故に、彼らの仕事は味はへば味はふほど深い味を示してくる。現代には、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすればそれが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種が出来るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてがあまりに人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても自由にその手足を伸すことが出来ない。天を衝かうとするやうな大きな願望は、いちけた根からは

生れる筈がない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。(偶像再興)

二六 グラッドストーン 水野鍊太郎

グラッドストーンが英國の大政治家であり、近世の一偉人であつたことは、皆人の能く知る所である。氏は一八〇九年に生れ、一八九八年に逝去せられたが、其の間國會に席を有すること前後六十四年、首相となること前後四回、嘗に英國のみならず、實に世界政治界の大立物であつた。今左に其の傳記中より得た氏の平生を少し述べて見よう。

グラッドストーン
Gladstone
水野鍊太郎
政治家
法學博士
貴族院議員
前内務大臣文部大臣
明治元年秋田縣生

ホーマー
希臘の詩人
西紀前九百年
頃の人

ダンテ
Dante
(1265—1321)
伊太利の詩人

氏は其の生活の大半を政治の舞臺に費したので、世人は氏を以て單に一箇の政治家とのみ見るであらう。しかし氏は決して只政治一遍の人ではなかつた。或は總理大臣として、或は政黨の首領として、極めて繁劇なる職務に就いて居たに拘らず、未だ曾て讀書を廢したことがなかつたのである。氏は古今の歴史に精通し、神學及び經濟學にも趣味があり、兼ねて詩歌文章をも能くし、また佛語伊太利語を極めて自由に語り、殊に伊太利の書籍を多く愛讀し、彼のホーマーやダンテの詩の愛誦は、氏の最も得意とした所のものであつた。ホーマーの詩に關しては自ら研究したもので、さす



ジョン・ラスキン

が専門の學者もこれには舌を卷いて驚嘆したといふ。晩年に至つては希臘羅馬の古文學をも研究し、有名なる歴史上神學上の新著で氏の手に觸れないものは殆どないといふ位である。氏は又政治・宗教に關する種々な論文を雑誌に投書したが、何れも筆鋒銳利、論旨精確、専門學者の參考に資するに足るものが

少くないといふことである。

氏は實に元氣旺盛の人であつて、話さない時には讀み、讀ま

ない時には書く。政治壇上に立つて大演説を試み役所に居つて公務を見る外、餘暇さへあれば必ず讀書し、讀了つた後は直ちに自己の意見を之に付する。「彼には休息といふことなし」との一句は、實に氏を評する恰當の文句である。身は一國の大政を料理する首相の地位に居り、或は大政黨を率ゐる首領の劇職にありながら、尙かゝる餘裕があつて、讀書に著書に其の時間を利用する。實に感嘆する外はないのである。かの些細な職務を執りながら、或は多忙なりといひ、或は劇務なりと稱して讀書の餘暇なきを口にするやうな輩は、氏の精勵を見て眞に愧死すべきである。加ふるに氏は對話が巧妙に圓熟し、能く人を引附ける力を

有してゐた。是は氏の性質が快活で、淡泊なる爲にもよるが、亦氏の知識が該博で、談話の材料が豊富であるがためである。氏は實に率直簡易で、少しも尊大の風なく、凡ての人に對して、常に同一の態度に出で、何人も氏には近づき易かつたといふことである。公務上に於ては頗る眞面目で、其の演説の如きは極めて激烈であつたため、或は氏を目して餘裕なき狹量の人とするものもあつた。しかし事實は決してさうでない。極めて洒脫な、往々頤を解かしめるやうな諧謔を交へ、人をして思はず對談に倦ましめなかつたのである。

氏は實に勇氣あり、決斷に富める人であつた。同時に事に

當つて精密周到に考慮を盡す人であつた。故に、一つの問題を解決しようといふ場合には、精細に之を調査し、可否の兩方面を比較し、輕々しくは之を決しない。若し時機が未だ到らないと見る時は、その時機の到來するのを待つのである。しかも一旦決斷がついた以上は、萬難を排しても之を遂行せんと努め、あらゆる障害、あらゆる危険を犯して顧みないのであつた。かの始には豪語しながら、少しの非難と故障とに遭遇して、逡巡し、躊躇するが如き似而非豪傑とは全く其の選を異にするものと言つてもよい。氏は又朋友に篤く、部下に親切であつた。如何なる場合にも、其の僚友部下を捨てるが如きことをしない。故に氏と

事を共にするものは、何人も安んじて其の命を奉じた。而して、また然諾を重んずる古武士の風があつた。祕密を守る觀念が最も強く、内閣で決した事項の如きは、たとひ如何なる反對に遇ふとも、其の内情を打明けて之を辯解しようとするやうなことは決してしない。どこまでも自己の操守を嚴にして、毀譽褒貶、一に他人の批評に任せたのである。蓋し多數の政治家の容易に眞似ることの出來ない點であらう。殊に政治家として氏に最も敬服すべき點は、何等黨派としての私心なく、偏見なきことである。されば其の政争をなすに當つても、只自己の信じて最も適當なりと認むる主義

ジェームス、ブ
ライス

James Bryce
(1838—) 英國の歴史
政治家

のために、どこまでも光明正大に奮闘するのであつて、決して陰險なる手段を以て敵手を陥るゝが如き卑劣なる行動を取らなかつた。故に當時にあつて政敵として相争つた人たちでさへ、氏の人格の崇高なのに敬服し、今日に於てすら尚これを稱揚して止まないのである。ジェームス、ブライスは氏を評して、「正義高潔にして、何等の偏見なく、怨に報ゆるに徳を以てする氏の如きは、各國政治家中、稀に見る所であつて、實に欽慕すべき人格である」と言つてゐる。英國の政争は士人の争である。とは、人の能く言ふ所であるが、其の然る所以は、氏の如き人格の高い政治家が之を指導するためであらう。

今や我が國の人心漸く荒怠し、譎詐陰險、一時を糊塗する風の或は盛ならんとする時に當り、偶、氏の傳を読み、深く感ずる所がある。よつて茲に其の一端を敍して、百年の後なほ氏を欽慕する情を表した次第である。(斯民)

二七 岩倉右府

井上 毅

月日の小車は旋りくゝて流るゝ水よりも早く、故右府公の世を去り給ひしより、今ははや十年餘りぞ過ぎぬる。

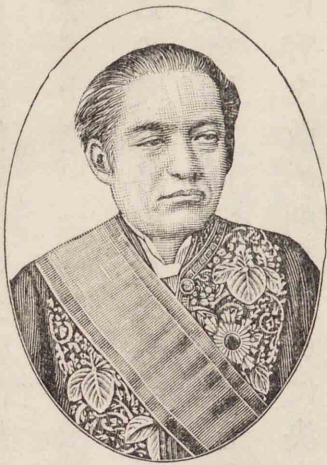
大詔のまにゝ、我が國を富士がねの安きに置かてやはと思ひ入り給へる公の一筋の誠心は、天地の間に満ちわたりて、窮みなき後の世まで語り継ぎ聞繼ぐべければ、今更に言

幼名り周丸
岩倉右府
右大臣岩倉具視
大勳位
公爵
明治十六年薨
年五十九
井上毅
法制家
文部大臣
子爵
熊本藩士
明治二十八年薨
年五十二

ふまでもなきことながら、公の逸事の一二を思ひ出づるま
 まに書き記して、世の鑑かたみともし、史人の料ついでともなさん。
 維新の初に、神武の古いにしへに復るといへる大義を定められしは、
 この公の輔翼たすけの力にぞある。碩學たかひに野々口隆正氏の説に、建
 武中興の振はざりしは、當時の摺紳すりしんにその人なかりしによ
 れり。源親房卿は學識ありて時の帝の御覚えもめでたか
 りしかど、この人の所見は延喜天曆の跡に復るにありて、神
 武の古に復る事を知らず。さてこそ公家武家の間に隙ひまを
 生ぜしなれといへり。
 故右府公は摺紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど、夙に大勢
 を達觀して王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を

野々口隆正
 國學者
 石見國津和野藩
 士
 明治五年歿
 年八十
 源親房
 吉野朝の忠臣
 神皇正統記の著
 者
 正平九年(一一四四)
 歿
 延喜
 醍醐天皇の御代
 (一一八二—一一八三)
 天曆
 村上天皇の御代
 (一〇六七—一〇七三)

擧ぐるために、神武の古に復るといへる一大義を唱へ給へ
 り。これぞ明治の朝廷に人ありと申すべき。この一大義
 は百揆もろとも庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤
 根錯節こんさくせつをば總べて破竹の勢
 を以て破りたり。世の人は
 明治の中興は五百年來の武
 門の政を破りたるなりと思
 ふらめど、心ある人は溯りて
 天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知る
 ならん。
 徳川氏の大政を返上せし際には、公は謹いんじんを蒙りて久しき間



岩倉具視

大政返上
 慶應三年(二五七)
 十月十四日

岩倉村蟄居
文久二年(三三)
九月公は山城國
愛宕郡岩倉村に
蟄居された
岩倉村は京都の
北四里の山里

玉松操
京都の人
勤王家
明治五年歿
年六十三

大令
慶應三年十二月
王政復古の大令
が下つた

筆蹟
詔、體太乙而
登位、膺景命
以改元、洵聖
代之典型、而萬
世之標準也。朕
雖否德、幸賴一

岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄かに召によりて夜中參内し給ひけり。この折、公は一の大囊を携へて宮門に入り給ひしが、囊中の文書は皆公が蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。

この時、大勢尙定まらずして物論紛々たりしに、公は俄かに躬を以て責に當り、從容として應答せしかば、雄藩の主も爲に容を改め朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は攝關議奏傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべからざる基礎を立てられたるは、實に公の輔翼の力なり。就中復古の第三日に、禁闔

祖宗之靈、祇承鴻緒、躬親萬機之政、乃改元、欲與四海內億兆、更始一新、其改慶應四年、爲明治元年、自今以後、革舊制、一世一元、以爲永式、主者施行。
明治元年九月八日
議政官
輔相
岩倉右兵衛督
中山儀同
正親町三條
前大納言
德大寺大納言
中御門大納言
松平中納言
山内中納言
宇和島宰相

詔體太乙而登位膺景命以改元洵聖代之典型而萬世之標準也
朕雖否德幸賴祖宗之靈祇秉鴻緒躬親萬機之政乃改元欲與四海內億兆更始一新其改慶應四年爲明治元年自今以後革舊制一世一元以爲永式主者施行
慶應四年九月八日改元
議政官
輔相
岩倉右兵衛督
中山儀同
正親町三條
前大納言
德大寺大納言
中御門大納言
松平中納言
山内中納言
宇和島宰相

改元の詔案(玉松操筆蹟)

に達文を掲げられて女房の請謁を納るゝことを痛く禁止せられたるは、是ぞ數年の宿弊を除き、將來の爲に一大美事を遺したるなる」と、公の晩年に親しく物語し給ひき。
玉松操は一の偉丈夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を讀むを樂みとなし、夙に神武復古の説を抱きぬ。偶、公に知られて蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして畫策する所あり。公は玉松の

功を推して、己の初年の事業は皆彼の力なり」とまでのたまへり。薨去の前年に、一夕ことさらに余を召して玉松の履歴を物語し給ひ、その人の功績を空しくなせそ。書き記して後の世の語り継ぎの料とせよ」と慇懃に仰せられけり。此の夜余は他の二人を誘ひて俱に侍りしが、その中の一人は漏れなく公の物語を筆に留めたり。己の功を推して人に譲り給ふこと、いとめでたし。

その後公の朝廷に勧めまゐらせて、斷然と開國の國是を執らるゝに及びて、玉松は「姦雄に誤られたり」との一語を言ひ放ちて公の許を辭し、召されても應へだにせず、一室に屏風をたて籠め、その中にて讀書に日を送りけるが、功を論じ賞

を領つ日に逢はずして世を去りぬるぞ歎かはしき」と公ののたまひし。

諸名士
大久保利通
木戸孝允
小松清廉
廣澤眞臣

公は蟄居していましながら、その家の裏の隠戸より、人知れず大久保、木戸、小松、廣澤等の諸名士を引きて内外の大勢を談論せられ、此の時己に鎖國の非なることを悟らせられつるに、玉松は露ほどもこの事を知らざりけり。彼が口惜しく思ひつるも理なりき。

維新後の公が翼賛の功は、明治の大御史と共に後の世に傳ふべきなれば、こゝに書きつゞくる要なけれど、公は己の勞を露ほども誇りがほに人に語り合ふことなかりしほどに、史人もえ知らぬことぞ多かめる。世の人は、明治二十年と

二十二年との條約改正中止の件をば、何某の盡力にて、となりし、かくなりしなど、事々しく言ひはやせど、この事のおこりは十五年にて、公はあかず思召すことありて一方ならず心を盡し給ひ、そのをり一たび中止となれり。されども公は深く祕め給ひて、文書一箱ほどもあるを家に藏めて出されざりしかば、内々の人ならではえ知る者なかりき。此等は後の人の鑑にこそ。

剛膽は政事家の第一要徳なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覺えぬばかりに剛毅の徳を備へおはしけり。征韓の議、今にも蕭牆の内に變亂を見んとする時に、陸軍將校の中にて武勇の聞えある一人は公の邸に參り、客室に謁見し、一

君臣水魚
 先主遂訪亮。
 凡三往乃得見。
 因屏人見之。
 與計事善之。
 於情好日密。
 關羽張飛等不悅。
 先主曰孤之有孔明猶魚之有水。
 願勿復言。
 (蜀志)

應二應議論の末、怒れる眼、血をそゝぎ、毛髮倒に豎ち、脇差を左の手にて鞘も撓むばかりに握りつめ、若し御意見を枉げたまはずば、御身のために悪しかりなん」と言ひ放ちつゝ、膝と膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時、公の家の侍ども次の間に控へ居て障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公は少しも動ずる色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ内の人の物語りし。

公のかしこきあたりの御覺え殊にめでたかりしは世の人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我をおきて人はあらじ。と思ひ給へる隠さはぬ明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか。雲の上の事は筆に載するも畏

ければ漏しぬ。

公は大久保故内務卿と心交特に深くおはしき。岩倉村塾居の折より、大久保卿は密々の往復しきりなりしが、公の身の上心もとなし。とて、夜な〜年少き侍を遣はして守衛せ



大久保久利通

させつることありしを、公は知り給はざりき。西南の亂平ぎし後、兩公の間に契り給ふ事ありしが、日ならざるに大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に、世の人大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。維新のはじめ十年間は創業撥亂の時なりき。これより後十年こそは内治を

大久保卿の遭難
明治十一年五月
参内の途次石川
縣人島田一郎等
に赤坂紀伊井町
で刺されて薨じ
た

整理し民利を進むる時なれとて、將來のため大いに計畫する所ありしに、料らずもかたみの言葉とはなりぬ。とのたまへり。
公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きことを世に知らせん爲の計入らひとぞ聞えし。

台鼎
太政大臣左右大
臣の三公
在り人三公。
在り天三台。
(漢書)
鼎三公象。
(尙書註)

公は勤儉の二字を大政の本として輔弼に心を盡し給ひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、岩倉村の蟄居の時をな忘れそ。とて常に公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、後の世まで守り文に

せよ。とて子孫に遺し給ひしが、その附録一篇は専ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にいましたつゝ、親しく旨を授けて侍ふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際に遺言ありて、己の墓石は父君の墓石の寸法ハシに準へよ」とありきとなん。

公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。朝四時前には目を覺し「倅やある」と聲かけさせ給ひ、今日は何某をば何時に召せ。次に、何某をば何時に呼べ。又明日は何某に何時に來れ、何某に夕何時に參れと記して申遣はせ。など仰せられき。多くの公達は父君

の代筆として文かくことに忙しかりきとなん。

公の病に侵され給ひつるは明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より、何となくあらざらん後の世の心づくしの節々を知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬或人のもとに贈り給へる書の末に、

さりともとかきやる浦の藻鹽草、

たがおりたちてかづきあぐらん。

とぞありし。先だつも後るゝも世の習とはいひながら、御國のために行末を思ひやられし公の心こそ、いとあはれなれ。

公の平生の仰に、大臣たるものはその進退によりて節操を

或人
本文の作者子爵
井上毅

二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなる。われこそ躬を以て人臣の標準は示さぬ。とのたまひしが、病重らせ給ひし後、辭表

を捧げん事を思ひ立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽き入れず、是非にとて歎き請ひ給ひしかば、上には忝くも誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞

(藏符子上井)蹟筆視具倉岩

届けさせ、厚き惠の御勅をさへ下し賜ひけり。かくと承りて、公はさしもに重き衾カミを押退け、涙に咽ノドび、天恩の忝カミきを拜

謝しつゝ、いそぎ家の子らを召しつどへられ、今日こそは病の輕きを覺えたれ。それ盃ハシまゐれ。とて酒を賜ひけり。人よろこびの色をなしたりけるが、さてその翌日に事重らせたまひぬるぞかひなき。今はのきはまで、夢幻の間にも、おほやけの事のみ心に懸けさせたまひ、なからん後の事までも人もて雲の上に聞え上げまゐらせしこともありきとなん。
余は本末の序もなく思ひ出づるまゝに書き續けぬ。あはれ、この文讀まん人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草を、いやつぎくにかづきあぐべき丈夫タカシの伴トモとなりて、公の地下の靈を百載の後にまで慰めよかし。(梧陰存稿)

嘉納治五郎

號は甲南
教育家
東京高等師範學
校名譽教授
講道館師範
貴族院議員
萬延元年(五〇)
兵庫縣西灘生

二八 膽力

嘉納治五郎

大丈夫と生れたからには、死生の境に出入して、從容自若として事に當り、天下の大事を談笑の間に決するだけの膽力を有したいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き來り、危巖頭上に崩れかゝるとも、悠然として身を持することが出来る。膽力のないものは、天井から鼠の糞が一つ落ちて來ても、膽を冷し色を失ふやうなことになるものである。

膽力は天稟に之を有して居るものも少なからぬのであるが、又決して修養し得られぬものではない。上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潜伏しな

Nelson
(1758—1805)
英國の海軍
提督

筆中
集大成
甲南

集大成

嘉納治五郎筆蹟

甲南

がら安眠して居つた事や、徳川光圀が六歳の時、暗夜に刑場に行つて死人の首を持歸つた事や、ネルソンが幼時から恐怖の何ものたるを知らなかつた事などは、皆天稟と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も亦決して稀でない。昔武田信玄の部下に岩間大藏左衛門といふ武士があつた。その容貌は魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、その性質は至つて卑怯であつた。信玄が之を實戦にためしてみたのに、七たび進んで

七たび退いた。信玄はこれではとても普通の方法で教誨
 激勵することは出来ない。と思つて、或日又戦争の始つた時、
 大藏左衛門を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐ら
 せて、一步も身動きの出来ないやうにした。矢丸は雨のや
 うに飛んで来る。銃聲は雷の如くに轟く。大藏左衛門は
 恐怖して殆ど死人のやうになつてしまつた。併しその戦
 争のしまひまで、幸に矢丸に中らなかつた。そこで大藏左
 衛門は翻然として悟る所あり、壽命さへあれば、雨のやうに
 下る矢丸でも中らない、死は決して畏るべきものでないと
 知り、その後は戦争毎に勇を奮つて前進し、遂に武名を揚げ
 たといふことである。

之を見ても、諦めるといふ心の持方の膽力養成に必要であ
 る事がわかる。危険災害等の場合に於て、成るべく安全に
 之を避けようとするのは自然の人情に相違ないが、しかし、
 さういふ心の爲に却て怯懦に陥る事があるのである。そ
 の最も悪い結果を身に引受けても是非に及ばぬといふ覺
 悟を極めれば、膽は自然にすわるのである。例へば眞劍勝
 負をするといふ場合に、敵刃を逃れようと命を惜んではな
 らない。まづ身を捨てる覺悟をきはめ、吾が骨を切らせて
 敵の命を奪へ。といふやうに死に身になつて、その上に吾が
 手段と伎倆とを盡す方が、命を惜むよりは自由がきくから、
 自然と數倍の働をする事が出来る。強ひて危害を避けよ

うとすると、煩悶し、疑惧し、狼狽して、自械自縛するので、十分の伎倆も六七分しか働かず、却て不結果に陥るのである。諦めるといふ心の持方の練習のある者は、危害が身に迫つたときにも、此の際に狼狽したところで仕方が無い、只今執るべき方法は唯一つのみ」と諦め、その方法に全力を盡して、さて敗れたならばそれまでの事と覺悟を極めてかゝるか、別に惶惑するやうなことはない。

落膽喪神は、或場合にはその危険の結果を豫想した後ではなくして、衝動的に直接の瞬間に起つて來ることがある。これは動物の本能の一つで、殆ど制止し難き勢を以て發動するものであるが、かゝる場合に何か良い工夫はないであ

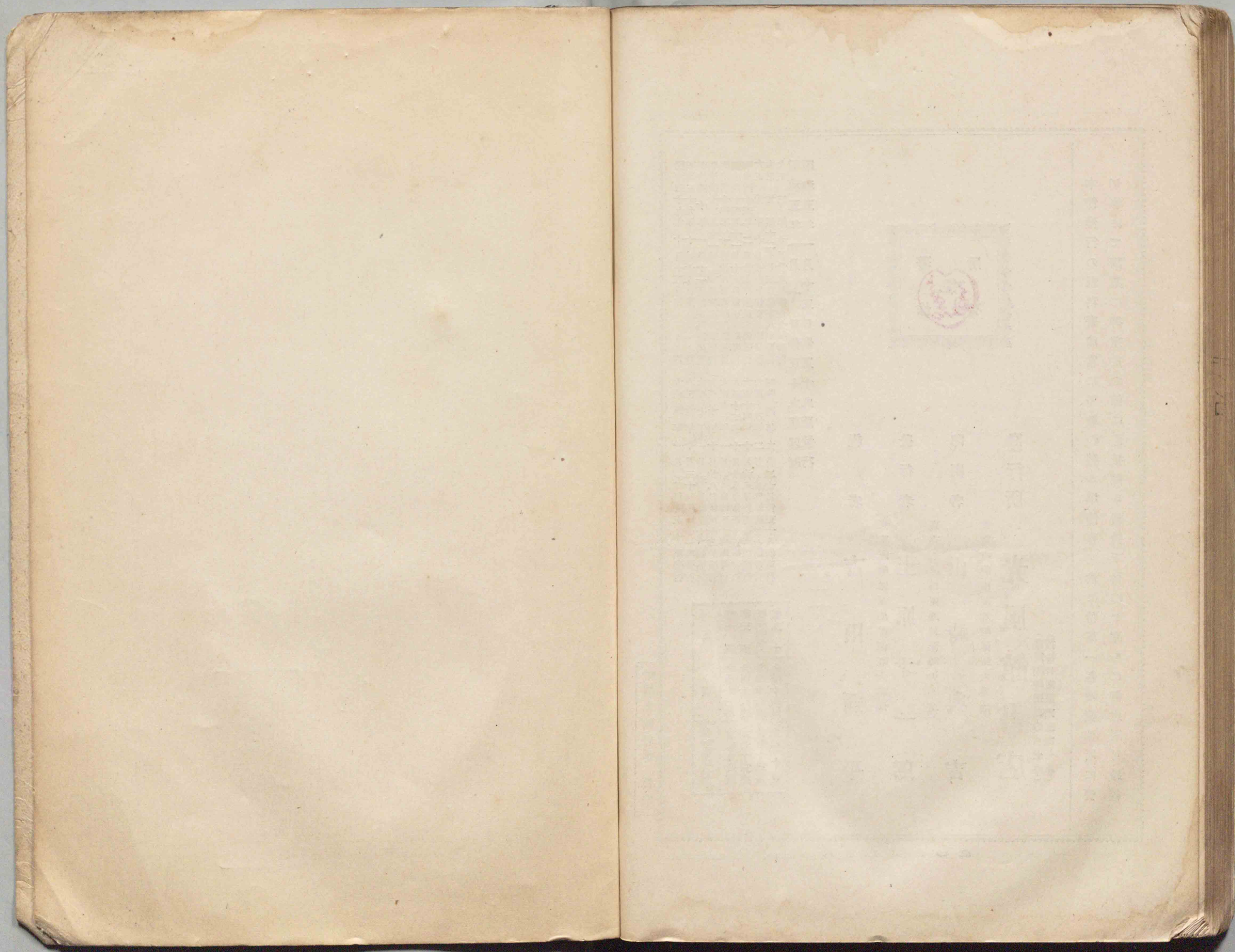
らうか。

雲居
高僧
土佐國幡多郡の
生
瑞巖寺
宮城縣松島町
にある禪寺
松島灣に臨む
伊達家の廟所
雄島
瑞巖寺の西南で
陸に近い島

雲居和尚といふのは伊達政宗に招かれて松島の瑞巖寺に住んで居つた名僧であるが、毎夜雄島の石窟に赴いて坐禪をして居つた。或時一少年がその悟道の程をためさうと思つて、路傍の松の上に隠れ、雲居が下に來た所を、手を延して頭をぐつと攫んだ。雲居は立止つたまゝで動かなかつたので、少年は手を放した。數日の後、その少年は雲居に向ひ、近頃寂しい處で怪物に出會つたことはなかつたか。と問うたら、雲居は答へて、いや、別に何も見たことはない。五六日前闇の中で自分の頭を攫んだものがあつたが、その手に暖みがあつたから、子供らの惡戯だと思つた。といつたさう

である。この雲居の沈勇は如何にして養はれたものであるか、定めて心膽を練つた結果であらう。しかし、かゝる場合に處すべき簡單なる一法として、此に少年者に告ぐべき事がある。それは他でもない、下腹に力を入れることである。これは氣を落ちつける一法として、古來經驗の上から有効と認められて居るものである。世に理窟の上からは妖怪のないことを信じてゐながら、暗夜墓地を通過して、石塔の陰から突然犬の飛出すのに、思はず膽を冷すやうなものがある。かういふ時に下腹に力を入れ、ると今飛出したのは犬であるか、猫であるか、或は他の者であるか、判断が付き易くなるのである。衝動的に起る恐怖

心を去るのも畢竟鍛錬の功に待つ外はないのであるが、吾人は年少の人に、まづその手始の一法として此の事を勧めるのである。さうして終には種々の工夫を凝して、天地の顛倒するやうな大變にも、泰然自若として我を失はない様な剛膽な人とならんことを望むのである。 (青年修養訓)



三九

新刊 卷之四

新刊 卷之四



庫
0
39

広島大学図書
2000054739
